

C	
画面	<p>【Aパート】</p> <p>前面 雲 カメラは雲の上  カメラが雲の中に入っていく。  そして雲を突き抜けると日本の  九州が見えてくる。  そして、その地図上に幕末の頃の  地域名が浮かび上がる。  地域名に合わせてカメラが付け  ていく。  そして津軽まで来るとカメラが  止まり、  弘前の方にカメラが寄っていく。  弘前の町並みが見えてくる。  弘前から金木村。そしてさらに  動いて岩木川に沿った  神原の渡し。</p>
音声	

仁太郎の家が見えてくる。

カメラはどんどん寄っていく。

仁太郎の家の屋根を突き抜ける  
様な感じで。

画面真っ白になり・・・。

タイトルin。

9		(神社正面と人々)
8	花笠の曲取をしている芸人達。	芸人達 「ほい。ほつ。ほい。ほつ。ほい。ほつ。ほい。ほつ。」
7	(花笠が in・out する。)	(ガヤ)
6	幾つかののぼりが立っている。	
5	(ゆきかう人々)	
4	ゴゼが三味線を弾いている。 (タマナ)	お面の店主 「ほーら、お面だよ。お面かっついてよ。」 子供 「わぁ、おサルのお面だ。」
3	(お面の店) (ゆきかう人々)	
2	金木村、神社境内。 出店等が立ち並んでいる。	
1	桜の花びらが降る1865年 (慶応元年)春。	

20	<p>女の子（ユキ）が楼門の上で鞠で遊んでいる。</p> <p>鞠をつく女の子。</p> <p>3回くらい鞠をつくとき、バウンドが変化して、階段を落ちていく鞠。</p> <p>鞠を追いかけるユキ。</p> <p>階段の下、手前の小川に鞠が落ちる。</p> <p>流れに沿って鞠を追いかけるユキ。</p> <p>（仁太郎の足が in してくる。）</p> <p>水しぶきが立つ。</p> <p>鞠を拾いあげる仁太郎。</p>	<p>囃子の音（このシーン以降41まで）</p> <p>鞠の音（木とゴムの間くらいの音で）</p> <p>走る音、ユキの息遣い</p> <p>ユキ 「待ってえ。」</p>
12		
11		
10		

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21				
ア然としている仁太郎。	ていくユキ。	礼も言わずゴゼに向かって走って行くユキ。	鞆を受け取るユキ。	(しばらく間があつて)	視線を仁太郎の顔に戻すユキ。	ユキニ鞆を差し出す仁太郎。	いる仁太郎。	下半身が完全に水路に浸かっているユキ。	けるユキ。	ユキに笑顔をむけている仁太郎。 (カット尻) ちよい目線を下に向けてユキ。	少し不安げなユキ。	駆け寄ってきて立ち止まるユキ。	駆け寄ってくるユキ。
ユキ	「かあちゃん。」			仁太郎	「はい。」								

3 1	仁太郎の父がやってくる。 仁太郎を持ち上げる三太郎。	
3 2	三太郎の方を振り向く。 笑顔で仁太郎を見ている三太郎。	三太郎 「……………」
3 3	仁太郎の前にかがむ三太郎。	三太郎 「そろそろ帰るか。」
3 4	何かに気付いた三太郎が目線を向ける。	仁太郎 「うん、帰る。」
3 5	続いて仁太郎もそっちを向いてみると、さっきの女の子が立っている。右手には何かを握り締め左手にはさっきの鞆を持っている。握り締めている右手を仁太郎に	ユキ off 「ありがとう。」

<p>3 9</p>	<p>3 8</p>	<p>3 7</p>	<p>3 6</p>
<p>三太郎。 目線を仁太郎の右手の方にやる</p>	<p>× × ×</p>	<p>(タマナの方へ向かっていく) 人ゴミの中に消えていくユキ。</p>	<p>差し出す。 少し恥ずかしそうに キョトンとしている仁太郎。 さらに仁太郎の方へ右手を差し出すユキ。 ユキから何かを受け取る仁太郎。 逃げるように走り去るユキ。</p>
<p>三太郎 仁太郎</p> <p>「良かったな。」 「父ちゃんには関係ないだろう。」</p>	<p>ユキ</p> <p>「はい。」</p>	<p>ユキ</p> <p>「これ、あげる。」</p>	<p>三太郎</p> <p>「ところで何もなかったんだ。」</p>

4 5	4 4		4 3	4 2		4 1	4 0
<p>夕方 金木村近辺のとある風景 並木道を歩いている仁太郎と三太郎。 仁太郎に気を遣いながら、少しからかうような感じで 少しうつむきかげんに、</p>					<p>自分の手の中にある物を見る仁太郎。 手を開いたまま</p>		
<p>三太郎 「仁太郎、どうしたんだ、さっきから黙ったまんまで。」</p>					<p>仁太郎 「父ちゃん、見るなよ。」 三太郎 「きれいな合わせ貝だな。」</p>		



5 2	5 1	5 0	4 9	4 8	4 7	4 6
仁太郎。 徐々に息遣いが荒くなってくる 仁太郎。	額に汗をかいている仁太郎。	仁太郎	仁太郎の方に振り向く三太郎。	三太郎 三太郎 三太郎	仁太郎 仁太郎 仁太郎	仁太郎 三太郎 仁太郎
「ハア、ハア、ハア。」	「……………」	「……………」	「おい！大丈夫か。熱でもあるんじゃないのか？」	「……………」	「……………」	「……………」
			「仁太郎、どうした？」			

5 9 B	5 9 A	5 8	5 7	5 6	5 5	5 4	5 3
渡し場で人々の前で笛を吹いていく。 (走馬灯のように画面が流れていく。)	仁太郎に駆け寄る三太郎。	ぐらつと気を失いかける仁太郎。	急にめがうつろになり	(仁太郎から見た三太郎の姿)	三太郎の方に目をやる仁太郎。	なんとなく不気味な並木道	
	仁太郎 三太郎 仁太郎	三太郎 三太郎	三太郎	仁太郎 仁太郎	仁太郎	三太郎 仁太郎	仁太郎
	「うん。」	「もう少して家だ。仁太郎、父ちゃんにおぶされ。」	「おい、仁太郎、大丈夫か？」	OH 「ハア、ハア、ハア。」 OH 「ハア、ハア、ハア……。」	「どうちゃん。」	OH 「仁太郎、どうしたんだ。」 OH 「ハア、ハア、ハア。」	OH 「ハア、ハア、ハア。」

59C	<p>いる仁太郎。 子供たちにいじめられる仁太郎。 家の表でないている仁太郎。 三太郎が仁太郎をあやそうとして苦労している。</p>	
64	<p>目を開ける仁太郎。少し息遣いが荒い。</p>	<p>仁太郎 「ハア、ハア、ハア。とうちゃん……。とうちゃん……。」</p>
65	<p>やさしそうな顔で仁太郎をみつめている三太郎。 意識がモウロウとし目は半開きの仁太郎。 三太郎の手がinして、手ぬぐいを取りかえる。 三太郎の手がoutする。</p>	<p>三太郎 「ここに居るぞ。」  仁太郎 「ハア、ハア、ハア……。」</p>

6 9	6 8	6 7
<p>少し声がひきつりながら……</p>	<p>涙をこらえようとすする三太郎。</p>	<p>（手ぬぐいを水につけ、絞っている音）</p> <p>再びしめった手ぬぐいを仁太郎のひたいに置く。</p> <p>三太郎の手out。</p> <p>仁太郎、意識モウロウ、目は半開き。</p>
<p>三太郎</p> <p>「そうだ……まだ真っ暗な夜だよ……。」</p>	<p>三太郎</p> <p>「えっ？夜？」（仁太郎のセリフに動揺する三太郎）</p>	<p>仁太郎</p> <p>「とうちゃん。」</p> <p>三太郎</p> <p>「んっ。」</p> <p>仁太郎</p> <p>「父ちゃん……暗くて何も見えないよ。夜なの？」</p> <p>三太郎</p> <p>「えっ？夜？」（仁太郎のセリフに動揺する三太郎）</p> <p>三太郎</p> <p>out 「仁太郎、やっときづいたか。随分うなされていたな。」</p>

	<p>夏、セミの声。 岩木山、笛の音。 テロップ 3年後—1868年 (慶応4年・明治元年)。 藁葺屋根の家々。風景と笛の音。 笛の曲が終了すると、口から笛を 離す仁太郎。</p>	
<p>7 9</p>	<p>7 8</p> <p>岩木川添いの土手 少し上に顔を向けて</p>	<p>留吉 〇「仁太郎。」</p>
<p>7 7</p>	<p>渡し場の方を見る留吉。</p>	<p>留吉 「大分上手になったなあ。」</p>
<p>7 0</p>	<p>留吉 仁太郎 「俺には笛しかないもん。留吉さんは渡し舟にはもう乗っ ているの？」 留吉 「お前の父ちゃんに色々教えてもらってさあ、 もう乗れるんだけど。」</p>	<p>留吉 「俺には笛しかないもん。留吉さんは渡し舟にはもう乗っ ているの？」 留吉 「お前の父ちゃんに色々教えてもらってさあ、 もう乗れるんだけど。」</p>

8 0	渡し場、二・三人の客、舟頭が船の上で腰をおろしている。	
8 1	キョトンとして答える仁太郎。	留吉 OF「お客さんを乗せるには、まだ体力がないってさあ。」 留吉 「俺さあ。大きくなったら自分の舟を持つのが夢なんだぜ。」 仁太郎 「夢?…か。」
	変に納得してしまふ留吉。	留吉 「マジメに聞いているのか?」 仁太郎 「聞いてますヨ。」
8 2	(尺八の音) 尺八の音に反応する仁太郎。	留吉 「そうか。」
8 3	虚無僧の尺八のUP	仁太郎 「ん……!」
8 4	(留吉) 仁太郎の方を見て	留吉 「虚無僧が渡し場で尺八を吹いてる。」 留吉 「行ってみようか?」

8 7	8 6	8 5
<p>仁太郎の目が悪いと知り、仁太郎を引き寄せ尺八の構えをさせる。</p>	<p>虚無僧、かがみ込んで カサを取る虚無僧。</p>	<p>仁太郎の腕を取り、引き起こそうとする留吉。 笛を腰にさす仁太郎。 (尺八の演奏が終了) 演奏が終わると人々の拍手。 虚無僧の前まで来る留吉と仁太郎。</p>
<p>虚無僧 「尺八はおまえ達が吹くもんじゃないんだが… まあ、少しならいいだろう。」</p>	<p>仁太郎 「おじさん。」 虚無僧 「なんだ、坊主？」 仁太郎 「オレにもちよつと吹かせてくれ。」</p>	<p>仁太郎 「うん。」</p>

9 2	9 1	9 0	8 9	8 8
<p>なんて、思いつき尺八を吹こうと</p> <p>なんとなく解ったような気にな</p>	<p>(2・3回くらいで)</p> <p>口の形を仁太郎に伝える虚無僧</p>	<p>て、</p> <p>自分の口元を仁太郎になでさせ</p> <p>に寄せて</p> <p>仁太郎の右手を取り、自分の口元</p>	<p>虚無僧、笑いながら</p> <p>しかし、音は出ない。</p>	<p>頬を膨らませて思いつき尺八</p> <p>を吹く仁太郎。</p>
	<p>虚無僧</p> <p>「どうじゃ、解ったかのう。尺八を吹くには唇をつきだして吹くもんじゃ。」</p>		<p>虚無僧</p> <p>「ガハハハ。そう簡単には吹けんもんじゃ。ホレ、手を貸してみろ。」</p>	<p>虚無僧</p> <p>「よし、吹いてみる。」</p>



9 7	9 6	9 5	9 4
<p>に) (一、二人の客に話かけるよう</p>	<p>客を乗せて三太郎が舟を漕いで いる。</p>	<p>(渡し舟がinしてくる)</p>	<p>する仁太郎。(音が出ない) 次に、さらに力を入れて吹くと屁 のような音がひびきわたる。 一同がドツと笑い出す。 大笑いの客と仁太郎の横顔。</p>
<p>三太郎 n 「命だけはとりとめたんですが・・・ あの通り目が見えなくなってしまうって・・・ あれが八つの時でした・・・仁太郎は鳴り物が好きでし</p>	<p>三太郎 n 「あれは不憫な子で、流行病で何日も高熱が続きました。」</p>	<p>客 「尺八が屁こいたぞー。」</p>	<p>一同 「ガハハハハ。」</p>

104	<p>仁太郎が手前を横切ると、その奥には母の形見の三味線が柱にかざられている。</p>	
103	<p>ガタピシの戸を引く。</p>	
102	<p>(シルエットの母の顔UP) 仁太郎、家の前までやってきて、</p>	
101	<p>仁太郎の母親のシルエット</p>	<p>三太郎 n 「ちゃんとした医者にも見せてやれなかったのが、心残り で。」</p>
100	<p>家に辿り着く仁太郎。</p>	<p>三太郎 n 「一年もしないうちに亡くなったんです。」</p>
	<p>杖をつきながら歩いている仁太郎。</p>	<p>三太郎 n 「死んだ母親が三味線弾きの旅芸人だったもので。 あれの母親はあれを産んでからすぐに体を壊し」 てね。」</p>

105	夜、月が出ている。	
106	仁太郎の家。	
107	竹で尺八を作っている三太郎 (竹で尺八を作っている三太郎のフカン)	
109	眠っている仁太郎	
110	—仁太郎、夢の中— 小さな虚無僧が画面に入ってくる。(リズムに合わせて) 真ん中まで入ってくると、そこで虚無僧はストップ。 正面を向いて、暫く音楽に合わせてその場で歩き、 音楽が終わるとカサをとりポーズを決める仁太郎。	

1 1 7	1 1 6	1 1 5	1 1 4	1 1 3	1 1 2	1 1 1
自分の手元を見る三太郎。少し陰	再び仁太郎の方へ顔をやる三太郎。	囲炉裏には少し火が残っている。	三太郎、顔を自分の手元に戻す	仁太郎の方に顔をやる三太郎。		仁太郎がバツと起き上がった、
仁太郎 「それじゃオレ、何になればいいんだ？」	三太郎 「そういう掟なんだ。」	仁太郎 「なんで侍しかなれないの？」	三太郎 「虚無僧は、侍しかなれないんだ。」	仁太郎 「オレ、尺人をいっぱい稽古して、虚無僧になる。目みえなくても尺人は吹けるし。」	三太郎 「えっ？」	仁太郎 「とうちゃん、オレ、虚無僧になる。」
仁太郎 「どうして？」	三太郎 「それはダメだ。」	仁太郎 「どうして？」				

1 1 8	<p>しい表情になる。</p> <p>そしてカメラがP A N D O W Nすると、そこには作りかけの尺八がある。</p>	<p>三太郎</p> <p>「……お前はまだ子供だ。」</p> <p>三太郎</p> <p>「そんな事は考えなくていい。」</p>
1 1 9	<p>岩木川の渡し場立て札を立てる。</p> <p>役人が渡し場に札を立て、その内容を三太郎や客達に話している。</p>	<p>○ ○</p> <p>何のお触れだ。</p> <p>○ ○</p> <p>手配書さだ。</p> <p>役人</p> <p>「御維新のどさくさに紛れて、お上の金を盗もうとした不届き者だ。」</p> <p>役人</p> <p>「商人の屋敷も狙われて、死者も出ている</p> <p>このあたりまで逃げてきているかも知れないので用心してくれ。」</p>
1 2 2	<p>立ち去る役人</p>	

<p>1 2 8</p> <p>A</p> <p>1 2 7</p>	<p>松屋</p> <p>たまなとユキがダンゴを食べている。</p> <p>手前を荷車が通り過ぎる。</p> <p>in/out</p> <p>間</p>	
<p>1 2 6</p>	<p>旅の男Cと隣の女が顔を見合わせ、</p>	<p>女</p> <p>三太郎</p> <p>「世の中いったいどうなっちゃうんだろうねエ。」</p> <p>「∴。」</p>
<p>1 2 5</p> <p>1 2 4</p> <p>1 2 3</p>	<p>旅人、三太郎の方を見て</p>	<p>三太郎</p> <p>「物騒な世の中になったなあ。」</p> <p>旅の男A</p> <p>「侍も食えなくなつて、何をするか分からなくなりましたねエ。」</p> <p>旅の男C</p> <p>「各地で幕府軍と新政府軍の戦いが続いているんだつてよ。」</p>

		農家の使用人B「ゴゼさん。」
1 3 5	ちよつと照れくさそうに。	お松 「しかも、このご時世だし。」
1 3 4	を採すしぐさ)	たまな 「いえ、それほどでも。」
	湯のみを置きたまな。(置く場所	お松 「あんた、体はあんまり強いようには見えないけど、娘さんとの旅は大変だろうに。」
1 3 3	手前を横切る通行人。	お松 「もう3年になるのかい。」
1 3 2		たまな 「かれこれ3年でしょうか。」
1 3 1	軽く会釈するたまな	お松 「そうかい、この神原へは何年振りになるかねエ。」
1 3 0	たまなの所まで来るお松。	お松 「たまなさん、お茶のおかわりはどうだい？」
	奥からお松が出てくる。	

1 4 5	1 3 6	遠くで三味線の音が聞こえてく	農家の使用人Bが i n
空	二人を見送るお松。		農家の使用人B 「あのくすみません。旦那様が三味線をお願いしたいと。」 たまな 「はい。わかりました。」
	ユキの肩に手を置きたまな。		たまな 「ユキ、用意をして。」
	たまなの前に出るユキ。		ユキ 「はい。」
	立ち上がるユキ。		
	1 3 8		
	1 3 7		
	1 4 3		農家の使用人B 「それではお願いします。」 たまな 「では…、行ってきます。」 お松 「あんまり無理しないようにね。」



1 6 6	1 6 4	1 6 3	1 6 2	∫	1 5 2	1 5 2	1 5 1	1 5 0	1 4 7	1 4 6
軽く会釈しつつ・・・	(演奏終了)	聴き入る仁太郎の顔UP	仁太郎、門の外で聴き入る。	皆、目を閉じて聴き入る。	(前奏) 歌い出すたまな。	三味線を弾く手のUP	ゴゼ唄を歌うたまな。	郎。	(耳をすまし) 立ち上がる仁太郎。	体を起こす仁太郎。
主人 たまな	主人									
「なんと言いますか、こう、心にしみる感じですかな。」	「いやー。今日の唄は本当に素晴らしかったですなあ。」									
	「ありがとうございます。」									

<p>167</p>	<p>使用人に向かつて</p> <p>たまなにおじぎをする使用人。</p> <p>奥に下がる。</p> <p>門から出てくるたまなとユキ。</p> <p>門の外で待っている仁太郎。</p> <p>チラッと仁太郎を見るユキ。</p> <p>たまなとユキのあとをつける仁太郎。</p>	<p>主人</p> <p>「これ、たまなさんにお礼を差し上げて。」</p> <p>使用人</p> <p>「はい。」</p>
<p>168</p>	<p>松屋周辺の風景。</p>	<p>お松</p> <p>off 「早いもんだねエ！」</p> <p>三太郎</p> <p>「何がですかい。」</p>
<p>170</p>	<p>ダンゴを食べる三太郎。</p>	<p>お松</p> <p>「なにがってほら、おきぬちゃんが死んでもう十二年経つんだねエ。」</p>

1 7 5	お茶を取る三太郎。 何処か遠くを見つめるお松。茶を フーフーする三太郎。 お茶を飲み終わる三太郎。 すぐくやさしい表情の三太郎。 お松の方を見て	お松 「三太郎さんは本当にかんばってるねエ。」 三太郎 「いやあー。」
1 7 4	声のする方に目をやるお松と三 太郎。	お松 「お松さん、ごちそうさまでした。」 ユキ 「どういたしまして。」
1 7 3		ユキ 「ねエ、いつまで付いて来る気なの？」 ユキ 「ほんとにアンタどうしたの？」 ユキ 「さっきからずうっと私たちの後をついて来てるけど・・・。」
1 7 5		ユキ 「さつき門の所で母ちゃんの三味線を聴いてたよね。」

176	たまなの方を見るユキ。	ユキ 「私達に何か用？」
177		たまな 「ユキ。」
178	三太郎が松屋の方からやって来る。たまなの近くへやってきて	たまな 「そんな言い方をしないで。」
179	ユキの方を見る三太郎。 仁太郎を見るユキ。  三太郎が仁太郎の前まで来る。	三太郎 「あの、こいつが何か迷惑でもおかけしましたでしょうか？」 たまな 「いえ、たいした事では。」 ユキ 「違うわよ。」
		ユキ 「さっきこの子が母ちゃんの三味線を聴いてて、その後ずっとついて来るのよ。」
		三太郎 「どうしたんだ仁太郎、ゴゼさんに用でもあるのか？」

<p>186 185 184 183</p>	<p>仁太郎の家（夜） 親指で2・3回糸をはじく。 たまなが仁太郎の母親の形見の 三味線を直している。 たまなの隣りに三太郎が座って いる。 ちらつとたまなの方を見る三太</p>	
<p>182 181</p>	<p>あたふたする三太郎。 ついに泣き出す仁太郎。 泣きそうな顔になる仁太郎。</p>	<p>三太郎 〇三 「……。どうして黙ってるんだ。」 仁太郎 「三味線……。」（つぶやくように） 三太郎 〇三 「何だって？」 仁太郎 「うう、しゃみせん。」 仁太郎 「ウワ~~~~~!!」 三太郎 「こら、泣くやつがあるか。」 三太郎 「おい、仁太郎？この間は尺八で、今度は三味線なのか。」</p>

188	B	187		A	187	186
寝入っている仁太郎とユキ			たまなの方を見る三太郎。	美人を前にして少し緊張している三太郎。	郎。	
三太郎	たまな		三太郎 「本当によろしいんですか？ 仁太郎に三味線を教えていただいて。」	三太郎 「仁太郎のやつがいきなり泣き出したと思ったら次にゴゼさんになりたいから三味線を教えて欲しいなんて言い出して どうしたものかと思いましたが・・・。」	たまな 「いえ、そんな事は。」	三太郎 「今日は本当にすみませんでした。」
「ありがとうございます。」						

192	191	190	189
	少し顔を下にやるたまな。	笑う二人。	三太郎をからかうたまな。 (少しの間があり)
たまな 三太郎	たまな 三太郎	二人	たまな 三太郎 「でも……。」 「でも？」 「いくら私でも、男である仁太郎さんをゴゼには出来ませんけどね。」 「ハハハハハ。」 「そうですね。男ではゴゼさんにはなれませんね。」 「はい。」 「それにしても、この三味線は本当に良い三味線ですね。」 「そうなんですか？」 「ええ。この三味線からは、これを弾いていた方の心……。」

193	間	<p>たまな 〇「いえ、魂のような感じます。……恐いくらい。」</p>
194	岩木山（初夏）	
195	舟を漕いでいる三太郎。	
196	岩木川を渡る渡し舟。	
197	仁太郎の家の中で、たまながヒザに仁太郎を乗せて三味線の稽古をしている。	
198	たまなが仁太郎の右手を取って、弦をリズム良くたたいている。	
199	リズムに合わせて音を上下するたまな。	
200	<p>（ゴゼ唄のヴァージョン） 仁太郎の手を取って、三味線のキーの位置を教えるたまな。</p>	



B	2 0 7	A	2 0 7	2 0 6	2 0 5	2 0 4	2 0 3	C	2 0 2	B	2 0 2	2 0 2
<p> たまなに甘える仁太郎。  それに応えるたまな。  客を乗せて三太郎が舟を漕いで  いる。  舟が岩木川を渡る。  たまなの弾いた曲（メロディー）  を仁太郎が真似して後弾きする。  三味線を弾くたまな  三味線を弾く仁太郎  二人同時に三味線を弾く（仁太郎  なめ）。  二人同時に三味線を弾く（たまな  なめ）  仁太郎UP </p>												

208	<p>たまなの三味線の寄り。 ラスト、強めに弦をたたく。 空、Q、PAN</p>	
210	<p>仁太郎の家の前</p>	<p>ユキ 「はやく脱ぎなさいよ！」 仁太郎 「いやだよ。」 ユキ 「私が洗ってあげるから。」</p>
211	<p>無理に仁太郎の服を脱がそうと、 服を引っ張るユキ。</p>	
212	<p>服が脱げる。勢いで四つんばいに 倒れ込む仁太郎。</p>	<p>ユキ 「ちよつとあんた、なにやってんのよ。」</p>
213	<p>ユキの方に見えない目をむけて</p>	<p>仁太郎 「無理やりぬがせなくなつて。」</p>
214	<p>何かに気付くユキ。</p>	<p>ユキ 「！」</p>

215	仁太郎に駆け寄るユキ。 立ち上がる仁太郎。	ユキ 「ねえ。」
216	股間を押さえる仁太郎。	仁太郎 「本当にもうだめだからな。」 ユキ 「ねえ。」
217	仁太郎の反対側に回り込むユキ。 仁太郎の胸元にある貝を見つめるユキ。 体を起こすユキ。	ユキ 「この胸にぶらさげてる貝、どうしたの。」 仁太郎 「これはなあ、小さい時、金木の神社で女の子にもらった。」 ユキ 「わあ、やっぱりそうだったんだ。 あんたにどこかで会ったことがあると思ってたの。」
217	ちよい顔を上げる仁太郎。	

2 2 1	仁太郎の家の中。 仁太郎の三味線をたまなが聴いている。	たまな 「仁太郎さん。」
2 2 0	ユキの貝と自分の貝を合わせる 仁太郎。	仁太郎 OFF 「・・・うん。」
2 1 9	ユキの貝と自分の貝を合わせる	ユキ 「自分の貝と合わせてみて。」
2 1 8	自分の胸元から何かを取り出そうとするユキ。 仁太郎の胸元の貝。 仁太郎の右手を取って、自分の貝を仁太郎に渡すユキ。	ユキ 「はい。」 仁太郎 「えっ、じゃあ。」 ユキ 「そう、あの時貝をあげたのは私。」

<p>2 2 8</p> <p>2 2 7</p> <p>2 2 6</p> <p>2 2 5</p>	<p>2 2 4</p> <p>2 2 3</p>	<p>2 2 2</p>
<p>縫い物をしているユキ。</p> <p>横になっている仁太郎。</p> <p>仁太郎の家の中。</p>	<p>たまな、強い口調で。</p>	<p>ちよつと顔を上げて仁太郎の三味線を邪魔するようにセリフ。 (このセリフで仁太郎の三味線がストップ) 少し厳しそうな表情のたまな。</p>
<p>仁太郎</p> <p>「ユキちゃんはどうして三味線をやらないの？」</p>	<p>たまな</p> <p>「では、もう一度初めから。」</p> <p>仁太郎</p> <p>「あつ、はい。」</p>	<p>たまな</p> <p>「三味線はただ弾いているだけではだめです。心の中の思いを三本の弦に伝えるように弾かなければ人に感動を与えることは出来ません。」</p> <p>仁太郎 n</p> <p>「心を伝える？」</p> <p>たまな</p> <p>○「解りましたか。」</p>

2 3 5	2 3 4	2 3 3	2 3 2	2 3 1	2 3 0	2 2 9
<p>(たまなと仁太郎の三味線の音) 夏の終わり 全面に稲穂が、緑から黄色になり つつある。 あたり一面にハンゴウソウが咲 き乱れている。 山頂に雲をいただいている岩木 山。 松屋の店先。 たまなと仁太郎が三味線を弾い ている。 (二人の演奏が終わる)</p>						
					<p>仁太郎</p> <p>ユキ</p> <p>「私はあんまり好きじゃないの。 私は裁縫を習って、お針子さんになりたいの。 大きくなつていい人に出会ったら、お嫁さん になるのよ。」</p> <p>「ふん。」</p>	

<p>2 3 6 2 3 8 2 3 7</p>	<p>仁太郎とたまなのまわりで七・八人の村人が二人の演奏を聴いていた。</p>	<p>村人 A 「いや、うまいもんだ。」 村人 B 「仁太郎、ずいぶん上手くなったな。」 村人 C 「母親も上手かったけど、仁太郎の方が上だな。」 村人 D 「仁太郎、よく頑張ってるな。」</p>
<p>2 3 9 2 4 0 2 4 1</p>	<p>仁太郎の家。 茶碗を置く三太郎。</p>	<p>三太郎 「それじゃ、やっぱり明日発つんですか？」 たまな 「はい。もう秋も近いですから。それに仁太郎さんに私の教える事はもうなくなりましたから。」</p>
<p>2 4 2</p>	<p>仁太郎だけ、もくもくとメシを食べる。 仁太郎の方を見る三太郎。</p>	<p>たまな 「あとは仁太郎さん一人でも大丈夫だと思います。」</p>

2 4 3	<p>食事を止める仁太郎。 それを少し寂しそうに見つめて いるユキ。</p>	<p>三太郎 「仁太郎、たまなさんの教えを忘れるなよ。」</p> <p>三太郎 「それにしても、明日とは急な話ですね。」</p>
2 4 4	<p>早朝、まだ少し朝靄が残っている。 早朝の渡し場</p>	
2 4 5	<p>――間―― たまなとユキが旅支度の格好で やって来る。</p>	
2 4 6	<p>お松の声に立ち止まるたまな。</p>	<p>お松 OFF 「たまなさん。」</p>
2 4 7	<p>ユキの方に目をやるお松。</p>	<p>お松 「元気だね。体にはじゅうぶん気を付けるんだよ。」</p> <p>たまな 「お松さんもお元気で。」</p> <p>お松 「ユキちゃんも元気だね。」</p>



2 5 8	2 5 7	2 5 6	2 5 5	2 5 3	2 5 2	2 5 1	2 5 0	2 4 9	2 4 8
仁太郎の声に反応して顔を上げるユキ。	仁太郎の声をこらえる仁太郎。	悲しみをこらえる仁太郎。	それを見送るお松と仁太郎。	岩木川をゆっくり進み出す舟。	舟がでようとしている。	悲しい横顔のユキ	(悲しみをこらえている表情) なぜか無言の仁太郎。	仁太郎を見るお松。	少し悲し気な表情でうなづくユキ。
仁太郎	仁太郎	お松	お松	お松	お松	お松	お松	お松	ユキ
「たまなおばちゃん。」	「ユキちゃん。」	「なんにも言わなくていいのかい。いつちやうよ。」	「ほら、何を黙ってるんだい。」						「うん。」

<p>2 6 8</p> <p>2 6 7</p> <p>2 6 6</p>	<p>2 6 5</p> <p>2 6 4</p> <p>2 6 3</p> <p>2 6 2</p> <p>2 6 1</p> <p>2 6 0</p> <p>2 5 9</p>
<p>——間——</p> <p>どこか小高い丘</p> <p>秋の稲穂</p> <p>(祭りの賑わいの音)</p> <p>金木村神社の秋祭り</p> <p>幟が立っている。</p>	<p>仁太郎の方を振り向くユキ。</p> <p>小さくなるお松と仁太郎の姿</p> <p>涙がこぼれるユキ。</p> <p>淡々と舟を漕いでいる三太郎。</p>
<p>留吉</p> <p>「仁太郎、金木神社に弘前の当道座が来てるらしいよ。行ってみるか？」</p>	<p>仁太郎</p> <p>「ありがとうー。」</p> <p>ユキ</p> <p>「元気でね。三味線ガンバツてねエ。」</p> <p>ユキ</p> <p>「……。」</p> <p>たまな</p> <p>「……。」</p> <p>仁太郎</p> <p>「……グウゥ……。」</p>

2 7 4	2 7 3	)	2 7 2	2 7 1	2 7 0	2 6 9
<p>少し顔を上げる仁太郎。</p> <p>金木神社、全景。</p> <p>幟が立っている。</p> <p>白くとんでいた画面に奥の実態が徐々に見えてくる。</p> <p>カメラがPAN DOWNすると、そこには本堂が見えてくる。</p>						
<p>仁太郎 「とうとうござ？」</p> <p>留吉 「目を悪くした男が三味線やビワの修行をするところさ。」</p> <p>仁太郎 「三味線を習えるのか？」</p> <p>留吉 「そうだ。修行を積んでボサマになると、門付けって言って、芸をして、お米やお金をもらえるんだってさ。」</p> <p>仁太郎 「留吉さん、行ってみようよ。」</p>						

2 8 1		2 8 0	2 7 9	2 7 8	2 7 7	2 7 6	2 7 5
仁太郎は静かに聴いている。	留吉は背伸びをしてなんとかボ サマを見ようとする。	客の中に留吉と仁太郎がいる。	検校が三味線を弾いている。	座している。	当道座なめ。	細棹の三味線（当道座）。 「ジャン ジャン」（ボサマの三 味線の音） カメラが見物人の間を抜けると、 そこには二十人程のボサマが正	
	客 A      オフ「でも、当道座もなくなるって噂だよ。」	客 B      オフ「たいしたもんだ。殿様の脈をはかったり姫様に琴を教え たりするんだそうだ。」	客 A      オフ「あの中央のボサマが検校様か。」				

2 8 7	2 8 6	2 8 5	2 8 4	2 8 3	2 8 2	
<p>（徐々に三味線の音が大きくなる）●</p> <p>垂幕の中では、当道座の連中が帰り支度をしている。</p> <p>留吉が地面に突き飛ばされる。</p> <p>中に入っていくボサマ。</p> <p>ガマンしている仁太郎の顔UP</p>						
留吉	留吉	留吉	留吉	留吉	留吉	客B
「渡し守のどこが悪いんだよ。」	「ウツ。」	「何すんだ。痛いじゃないか。」	「やせても枯れても当道座だ。お前達のような渡し守のせがれ風情では無理だ。」	「少しぐらい三味線が出来たからといって当道座には入れないんだ。」	「ほらっ、とつとと帰んな。」	○●● 「そうなたらボサマ達どうするんだろう。」

290		岩木川が激しく波うっている。 渡し場。			<p>仁太郎 「当道座に入れなくても、オレは自分の三味線を弾くぞ。」</p> <p>三太郎 「三味線を弾きたきや自分でやれ。でも、当道座には入れないぞ。」</p> <p>仁太郎 「またオキテか。何でやりたい事ができないんだ。なんでやれる事が決まってるんだ。オレは三味線がやりたいんだ。」</p> <p>三太郎 「三味線を弾きたきや自分でやれ。でも、当道座には入れないぞ。」</p> <p>仁太郎 「なあ、父ちゃん。」</p> <p>三太郎 「うん？」</p> <p>仁太郎 「何で渡し守の子では当道座に入れないんだ。」</p> <p>三太郎 「それは、な。身分というものがあって、お前には無理なんだ。」</p>
		岩木川が激しく波うっている。	夕陽		<p>289 岩木川、三太郎が仁太郎を乗せて舟を漕いでいる。●。</p> <p>288</p>

2 9 6		2 9 5	2 9 4		2 9 2	2 9 1
く三太郎。 そして家に帰ろうとして振り向	郎。 作業が終了し、立ち上がる三太	と引つ張る三太郎。	2・3回ぐらい綱をキュツキュツ	三太郎の横顔。 帰ってしまいう仲間。	仲間の方を見る三太郎。	雨の中、舟の留め綱を木に巻きつけている三太郎。 舟頭仲間が来て、
	三太郎 「よし。」			三太郎 舟頭 A 三太郎 「オレ一人で大丈夫だ。」 「解った。オレは先に帰ってるぜ。」 「ああ、そうしてくれ。」	舟頭 A 「そっちはどうだ、三太郎。」	

306	305	304	303	302	A。	侍Bが少しのりだす。刀をぬく侍	301	300	299	298	297
三味線弾く仁太郎ななめ。	三味線弾く仁太郎 u p	仁太郎が三味線を弾いている。	仁太郎の家。	三太郎の顔UP。	侍の刀が三太郎に向けられる。				侍二人がすごいで三太郎をにらみつける。	後退りする三太郎。	(そこに男が二人)
							侍B	三太郎	侍A	三太郎	
							「出せと言ったら出すんだ。」	「この天候じゃ無理だ。」	「おい舟頭、舟を出せ。」	「！」	



3 1 4	3 1 3	3 1 2	3 1 1	3 1 0	3 0 9	3 0 8	3 0 7
	荒れ狂う岩木川を渡る舟。	弦を抑えている仁太郎の指。	顔。 三味線を弾いている仁太郎の横	揺れている舟の上の三太郎。	揺れている舟の上の侍B。	揺れている舟の上の侍A。	大きく上下に船が揺れている。
三太郎	「だんな方、これ以上はもうだめだ。岸へ付けましょう。」						

3 2 2	<p>暗い部屋。 しかし、隙間から朝日がさしこんでいる。 すずめの声などが聞こえたりす</p>	
3 2 1	●。	
3 2 0	<p>何かに反応したのか、少し顔を上げる仁太郎。</p>	
3 1 9	<p>— 無音 —</p>	<p>三太郎 n 「にたろう。」</p>
3 1 8	<p>突然、舟の先端が持ち上がる。 (舟がひっくり返る)</p>	
3 1 7		<p>侍 A 「いいから行け！」</p>
3 1 6		<p>三太郎 「このままだと本当に死んじゃいますぜ。」</p>
3 1 5	<p>三太郎に叫んでいる侍 A。</p>	<p>侍 A 「だめだ、このまま行け。」</p>

	3 2 3	3 2 4	3 2 5	3 2 6	3 2 7	
る。	部屋の中には三味線を抱え込んで寝ている仁太郎。	寝ている仁太郎。	戸をたたく音なし。いきなり戸を開ける。		(霧がかかっている) なんとなく不気味な感じのする並木道。	――間―― 昨夜の大雨で水量が増している岩木川。
<p style="text-align: center;">留吉</p> <p style="text-align: center;">「仁太郎――」</p>						

<p>3 3 6</p>	<p>3 3 5</p>	<p>3 3 4</p>	<p>3 3 3</p>	<p>3 3 2</p>	<p>3 3 1</p>	<p>3 3 0</p>	<p>3 2 9</p>	<p>3 2 8</p>
<p>その日の夕方 岩木川の合流地点の河原。</p>				<p>途方に暮れる仁太郎。</p>		<p>侍の死体を見ている村人。</p>		
<p>すると、岩木川の水面に三太郎が立っている。</p>				<p>●</p>		<p>お松 ○● 「三太郎さんは、あんなに泳ぎが達者だったのに。」</p> <p>留吉 ○● 「でも、昨日の大雨じゃとてもじゃないけど。」</p> <p>村人 ○● 「どうしてこんなことに。」</p> <p>お松 ○● 「かわいそうに。」</p> <p>村人の女 ○● 「仁太郎、どうするんだろう。」</p> <p>村人 ○● 「目の不自由な仁太郎じゃ、この先、生きていけるかどうか。」</p> <p>留吉 ○● 「あいつ、一人ぼっちになったんだよな。」</p> <p>仁太郎 「父ちゃん、父ちゃんが死んじゃって、オレ、もう生きられないよ。オレなんか、なんで生まれてきたんだ。」</p>		

3 4 2	3 4 1	3 4 0	3 3 9	3 3 8	3 3 7
<p>顔を上げる仁太郎。 しかし三太郎はもうそこには居</p>					
	仁太郎	三太郎	仁太郎 n	三太郎 n	仁太郎 n
	「父ちゃん、オレやっぱり三味線やる。たまなさんに習った三味線、もつともつと上手くなってみんなを感動させてみせる。」	「仁太郎、さあ元気を出せ。お前の三味線をみんなが待ってるぞ。」	「……。」	「仁太郎、人は何かの役目を持って生まれてきたんだ。お前は、三味線や尺八で人を楽しませる事が出来るだろう。」	「でも、オレなんか。」
					三太郎 n 「仁太郎よ、お前はあの流行病でも死ななかつたんだ。あの時たくさんの子が死んだんだぞ。お前は強い子だ。目が見えなくなつて、父ちゃんがなくなつて立派に生きていけるさ。」

3 5 2	3 5 1		3 5 0	3 4 9	3 4 8	3 4 6	3 4 5	3 4 4	3 4 3	
仁太郎。 また、トビラを閉められてしまう 仁太郎。	また、トビラを閉められてしまう 仁太郎。	また、トビラを閉められてしまう 仁太郎。	トビラを閉められてしまう仁太 郎。	コワそうな男の前で三味線を弾 いている仁太郎。	怖そうな男の顔UP	首をひねる仁太郎。	戸を閉められる仁太郎。	2回ぐらい弦を弾く。	晴天。(音楽)	なかった。

3 5 3	次々にトビラが閉められてしま う。
3 5 4	また、トビラを閉められてしま う。 仁太郎。
3 5 5	次々にトビラが閉められてしま う。
3 5 6	バタン。 おじぎをする仁太郎。
3 5 7	秋の黄葉。 土手を杖をつきながら歩いてい る仁太郎。
3 5 9	(少しお腹がすいている)
3 6 0	お地蔵さん カラスがお地蔵さんのまんじゆ うをねらつて降りてくる。

A	3 6 3	3 6 2	3 6 1
	<p>すると、お地蔵さんの裏側でまんじゅうを食べてる仁太郎。</p>	<p>て カラスがすこしキョロキョロして</p>	<p>ピョンピョンとまんじゅうに近づくカラス。 カラスがまんじゅうを食べようと とする。 左側から仁太郎の手が入ってきて、まんじゅうをつかむ。 何回か手の出入りがあつて、まんじゅうを全て持って行ってしま う仁太郎。</p>
	<p>お地蔵さんの頭の所に飛び移り、 反対側をのぞく。</p>		



3 6 9	3 6 8	3 6 7	3 6 6	3 6 5	3 6 4	B	3 6 3
どこかの神社の祭り、人々の影が ている仁太郎。	どこかの家の軒下で雨宿りをし ている仁太郎。	三味線を抱いて寝ている仁太郎。	どこかの小屋の中で寝ている仁 太郎。	笑顔の仁太郎。	（民家の前で三味線を弾く仁太 郎） 家の人が出てきて、仁太郎の前カ バンの中に何かを入れている。	（目をパチクリさせる） くやしがつているカラス。	仁太郎にまんじゅうを取られて、

3 7 2	3 7 1	3 7 0
<p>手前を吹雪がさえぎり、何も見えなくなる。</p>	<p>吹雪の中を杖をつきながら歩いている仁太郎。(吹雪の音)</p>	<p>行き交う。 茶碗にはいくらかの銭が入っている。 その中にまた小銭がなげられる。</p>
<p>人</p> <p>○ 何か味わい深いものがあるってさ。」</p>	<p>人</p> <p>○ 「自己流で弾いてるみたいだけど、 三味線のスジはなかなかのようだよ。」</p>	<p>人 ●</p> <p>○ 「あの三太郎のせがれが三味線弾きになったんだって。」</p>

C	6 5 4 3 2 1
画面	<p>【Bパート】</p> <p>初春の岩木山。山頂には雪が残っている。</p> <p>金木村。数人の人々が行き交っている。</p> <p>(仁太郎の三味線の音)</p> <p>7年後、明治8年(1875年)初春。</p> <p>金木村に野菜を売りに来ている人。</p> <p>家の横に置かれた薪のたば。</p> <p>造り酒屋『麴屋』。</p> <p>門付けの三味線を弾いている仁太郎。</p> <p>三味線を弾く仁太郎。</p>
音声	

	7	8	9	10
	走る馬車。	馬車の音に「んっ!？」と見る奉 公人達。	奥から菊之助が馬車に乗ってや って来る。	やっ来て止まる馬車。 奉公人A、店へと駆け込んでい く。
				菊之助、ニッコリと。 馬主に礼を言う菊之助。 うなづく馬主。
奉公人A	「若旦那。」			
奉公人A 奉公人B	「おかみさん、若旦那がお帰りになりました。」 「おかえりなさい、若旦那。」			
菊之助	「ただいま。」			
菊之助	「ありがとうございました。」			
馬主	「ああ。」			

1 4	<p>横のカバンを手に取り、 馬車より降りる菊之助。 店の中より出てくる母親と奉公 人A。</p> <p>馬車の荷物を見る母親。</p> <p>奉公人B、菊之助の荷物を受けと り、店の中へと運んでいく。</p> <p>苦笑する感じに荷物を見る菊之 助。</p> <p>(仁太郎の三味線UP) (ん?)と仁太郎の三味線を 気に止める菊之助。</p>	<p>母親 「おかえり、菊之助。」</p> <p>菊之助 「ただいま。」</p> <p>母親 「それにしてもたいそうな荷物だね。」</p> <p>菊之助 「そうなんです。東京でちょっとした買い物をしてきまし たから。」</p>
--------	---	---

<p>19 18</p>	<p>17 16</p>	<p>父親、母親の前で頭を下げている</p>	<p>奥で三味線を弾きつづける仁太郎を見ている菊之助。 母親、奉公人Aをチラリと見て（ん？）と仁太郎を見る母親。 （しようがないなあ、という感じに）奉公人Aに目配せ。 うなづく奉公人A。 奉公人A、仁太郎に歩み寄り、袖の中にお金らしき物を入れる。 頭を下げる仁太郎。 さらに激しく三味線を弾く。 それを見ている菊之助。</p>
<p>菊之助 「父さん、ただいま帰りました。」</p>	<p>奉公人A 「はい。」</p>		

2 2	2 1	2 0
<p>菊之助。</p> <p>体をおこす菊之助。</p> <p>少し表情を曇らせる菊之助。</p>		
<p>父</p> <p>「ほほう、新聞か…」</p>	<p>父</p> <p>「東京でそんな事まで分かるのか。」</p> <p>「はい。新聞という物が発行されて、様々な情報を知る事が出来ます。」</p>	<p>菊之助</p> <p>「しかし、新しい国家を目指しての改革は進んでいるもの…、残念ながら、地方では今だに旧武士階級の反乱の噂が絶えないですね。」</p> <p>菊之助</p> <p>「はい、父さん。江戸から東京になって7年、本当に全てが物凄い勢いで変わっていますよ。鉄道が通ったし、西洋風の建物や食べ物もどんどん入ってきています。」</p> <p>菊之助</p> <p>「元気は何よりだ。ところで菊之助、江戸…東京の方はどうだ？」</p>

2 6	2 5	2 4	2 3	2 3	
<p>（一回父親を見て話しを止めさせる演技）</p> <p>菊之助を見る母親。 母親を見る菊之助。</p> <p>いかにも関心ない感じの母親。</p> <p>うれしそうに微笑する菊之助。 顔を外に向ける。</p>					
<p>母 「まあまあ、積もる話は後にして」</p> <p>母 「とにかく部屋に戻ってゆっくりしなさい。」</p> <p>菊之助 「そう言えば母さん、さつき入り口の所で三味線を弾いていた若いボサマがいたけど。」</p> <p>母 「ああ、仁太郎かい。」</p> <p>母 「神原のほうから出てきて、時々この金木周辺にも来てるみたいだけど。最近評判みたいだね。」</p> <p>菊之助 「久しぶりに津軽の三味線を聞いたけど、すごく力強い三味線を弾く若者だったなあ。」</p>					



	キャラは逆光。	
<p>27</p> <p>28</p> <p>29</p> <p>30</p> <p>31</p> <p>32</p> <p>33</p>	<p>神原村の小さな寺。</p> <p>お盆の時期、数名の村人がいる。</p> <p>小さな寺。山門。</p> <p>(カメラが山門を抜け、境内に入っていく)</p> <p>仁太郎と三人のボサマが門付けをしている。ボサマに●。</p> <p>仁太郎が門付けをしている。</p> <p>三味線を弾いている仁太郎</p> <p>仁太郎から右へPANすると、家の中に菊之助がいる。</p> <p>仁太郎の三味線を聞いている菊之助。</p> <p>夕方。</p> <p>小さな寺の本堂。(もう既に村人</p>	

3 8	3 7	3 6	3 5	3 4
<p>達はいなくなっている)</p> <p>顔を少し上げる仁太郎。</p> <p>(目線は下)</p> <p>ちよつと顔を上げる。</p>				
<p>仁太郎</p> <p>「はい。以前、この神原に来られた、たまなというゴゼさんに三味線の基本を習いました。」</p>	<p>仁太郎</p> <p>「はい。以前、この神原に来られた、たまなというゴゼさんに三味線の基本を習いました。」</p>	<p>菊之助</p> <p>「はい。以前、あなたの三味線を聞かせてもらってね。もう一度聞きたくてここに来ました。」</p>	<p>仁太郎</p> <p>「それは、ありがとうございます。」</p>	<p>菊之助</p> <p>「はい。私は金木の麴屋の息子の菊之助という者です。以前、あなたの三味線を聞かせてもらってね。もう一度聞きたくてここに来ました。」</p> <p>仁太郎</p> <p>「はい、そうですけど。あなたは？」</p> <p>菊之助</p> <p>「すみません、仁太郎さんですよね。」</p>

4 3	4 2	4 1	4 0	3 9	
松屋の中からお松が出てくる。	仁太郎達を見ているボサマ達。 ヒソヒソ話をしているボサマ達。	仁太郎、菊之助の奥で三味線をし まいながら	目が見えないので少し頭をかし げるような演技で。	再び頭を下げる仁太郎。	
ボサマ○ ボサマ○ ボサマ○	ボサマ○ ボサマ○ ボサマ○	仁太郎	菊之助	仁太郎	その後は自己流でがむしやりに弾いてきました。」
「やるか。」	「そうだな。」	「やるか。」	「はい。ぜひその時は寄らせていただきます。」	「褒めていただいてうれしいです。」	「仁太郎さん、今度金木に門付けに来たら、 また麴屋に寄って下さい。お願いします。」

4 8	4 7	4 6	4 5	4 4
改番所の門の所で門付けをして いる仁太郎とボサマ達。	最初は誰だか分からないお松。	おまつの前に一人の女性がやっ て来る。	人の声に反応して体を起こすお 松。	手前へ来るお松。 お松が水撒きをしようとしてい る。 庭に水を撒くお松。(2回くらい) お松の方に人の影がやって来る。
	お松 お松 「あんだ、もしかして。」	ユキ 「お松さん、久しぶりです。」	お松 off 「……。」	ユキ off 「お松さん。」

5 3	5 2	5 1	5 0	4 9
<p>足をからませ、その場にしりもち</p>	<p>仁太郎を突き飛ばす。</p> <p>ます)</p> <p>(ボサマAのみ弱視で少し見え</p>	<p>ボサマA。</p> <p>仁太郎の胸ぐらをつかんでいる</p>	<p>人だかりが出来ている改番所前。</p> <p>集まってくる見物人。</p>	<p>仁太郎には数人の客がいるが、ボサマ達には客は一人もない。</p> <p>仁太郎をにらみつけているボサマA。</p> <p>ザワつく人達。</p>
<p>仁太郎</p> <p>「うわ〜！」</p>			<p>ボサマA 〇H5 「やかましい三味線弾きやがって！ 商売の邪魔すんじゃねえ。」</p>	<p>ボサマA 「ケツ……。」</p>

5 4	<p>をつく仁太郎。 倒れたと同時に、持っていた三味線を落としてしまう。 飛ぶ三味線。</p>	<p>SE：ガツン！</p>
5 5	<p>地面に転がる三味線。 ハッとなって顔を上げる仁太郎。 (かなり焦っている)</p>	<p>仁太郎 「！」</p>
5 6	<p>体を起こす仁太郎。 手探りで三味線をさがす仁太郎。 杖で地面をさぐり、歩み寄るボサマC。</p>	<p>ボサマB 「お前みたいなモグリが、あちこちにしゃしゃり出んじゃねえんだよ。」</p> <p>ボサマC 「このままでは我々本職の商売は」</p> <p>ボサマC 「あがったりだ！」</p>

5 9	5 8	5 7
<p>駆寄り仁太郎をひきはがそうと するボサマA。</p>	<p>ボサマに飛びかかる仁太郎。 バキッ!</p>	<p>杖で仁太郎を突き立てる。 グイグイと杖を押し付けられる 仁太郎。</p>
<p>ボサマB 仁太郎</p> <p>「このやろう!」 「当道座だって、もう解散したんだ。 みんなが喜んでくれる三味線を弾いて何が悪い。」</p>	<p>仁太郎 ○○</p> <p>「うああ。」 「時代は変わった●。ご維新の後、誰もが 尺八も吹ける、三味線も……。」</p>	<p>ボサマA 仁太郎</p> <p>「おい、仁太郎。何か言え。」 「うおっ!」</p>

6 5	6 4	6 3	6 2	6 1	
倒れている仁太郎。	ボサマの手。 仁太郎の袋より財布を奪い取る	見ている見物人。	蹴られる仁太郎。 もう身動きが取れないくらい傷めつけられている。	ボサマ達に蹴られる仁太郎。	粘って叫び続けるがひっぱがされる仁太郎。 起き上がるボサマA。
ボサマA	ボサマ3人	仁太郎	仁太郎	ボサマ3人	
「こいつはいただいておくれ。」	「なめたマネしやがって！二度と弾くな。」（アドリブ）	「くっ…。」	「ひどいな」		
	「関わらん方がいい。」	「見物人」	「見物人」		



6 8	6 7	6 6
物入れを見てニヤリとするボサマA。	えっ！と振り向くボサマ達。 人の中を割って入って来る役人。	立ち上がるボサマA。仁太郎を指差し、
警棒を手に役人、	ボサマA	「大勢で一人をいじめるのは卑怯というもの。 お前達はこの若いボサマに恨みでもあるのか。」
役人	ボサマB	「おい、やめる。」
「なんだと？理不尽なのはお前達の方だろう。」	役人	「とにかく、世の中新しくなったんだ。 武士やボサマの特権もなくなった。 誰がどんな三味線を弾こうとよいではないか。」
「そんな理不尽な」	ボサマA	「こいつが一人前のボサマ面して、生意気な三味線を弾くもので、ちょっとこらしめていたところでした…。」

7 1		6 9
<p>見送る役人、見物人達。      厳しい表情で見物人たちを見て、</p>	<p>ボサマA、ボサマB・ボサマCの      手を取り、そそくさと逃げて行く      ボサマ達。</p>	<p>ボサマ三人を見る感じで。      役人におどされ、びくつくボサマ      達。      ボサマA、仁太郎から奪った財布      を返す。</p>
<p>見物人A      「ボサマ達のいざごにおれたちが口をはさむ      っつのも、なあ？」</p>	<p>ボサマA      「へへえ・・・」</p>	<p>役人      「お前たち、お上がなされたご維新に楯突く気か。」      ボサマC      「決してそんな訳では…。」</p>

7 7	7 6	7 4	7 3	7 2
<p>位牌にごはんとお酒がそなえて せている仁太郎。</p> <p>父の粗末な位牌の前で、手を合 わせている仁太郎。</p>	<p>仁太郎の小屋。</p> <p>父の粗末な位牌の前で、手を合 わせている仁太郎。</p>	<p>ホッとひと安心する仁太郎。</p> <p>三味線を取り上げ抱き締め、壊れ ていないかとまさぐる。</p>	<p>心配そう。</p> <p>三味線を見つめる。</p> <p>傷つきながらはって来る仁太郎。</p> <p>三味線を見つめる。</p> <p>地面をまさぐり三味線を探す仁 太郎の手。</p>	<p>地面に落ちてしている仁太郎の三味 線。</p> <p>地面をまさぐり三味線を探す仁 太郎の手。</p> <p>三味線を見つめる。</p> <p>傷つきながらはって来る仁太郎。</p> <p>三味線を見つめる。</p> <p>地面をまさぐり三味線を探す仁 太郎の手。</p>
		<p>見物人 B 「あ、ええ……。」</p>		

8 1	8 0	7 9	7 8
<p>(えっ!)と驚く仁太郎。</p>	<p>入ってきなさい、という感じに。</p> <p>ユキ、うつむいて入ってくる。</p> <p>その後顔を上げる。</p>	<p>戸を開けるお松。</p>	<p>ある。</p> <p>戸板を叩く音。</p> <p>仁太郎(ん?)と振り向き立ち上がって戸の方へ行き腰をおろす。</p>
	<p>お松</p> <p>「さあ。」</p>	<p>お松</p> <p>「ちよいと仁太郎。」</p> <p>お松</p> <p>「あたしの隣にいる人、誰だと思う。」</p> <p>お前さんが三味線を習った、</p> <p>あの、たまなさんの娘だよ。」</p>	<p>仁太郎</p> <p>「お松さん、戸は開けてますよ。」</p> <p>お松</p> <p>「仁太郎、いるかい？」</p>

8 7	お松に向かって顔をむける仁太郎。	立ち上がり、お松を見るユキ。
8 6	8 5	8 4
	お松に向かって顔をむける仁太郎。	ユキ、ほほえんでいるが瞳はうるんでいる。
	ユキ、ほほえんでいるが瞳はうるんでいる。	ユキ。
仁太郎の前で少し腰をかがめるユキ。	仁太郎の前で少し腰をかがめるユキ。	仁太郎の前で少し腰をかがめるユキ。
ユキ	「頼る人がいなくて、松屋のおばさんや仁太郎さんの事を思い出して、何とかここまで来たの。おばさんにはすっかりお世話になって。」	お松 仁太郎 「ユキさん…。」 「仁太郎、たまなさんがね、少し前に旅の途中で亡くなったんだって。ユキちゃんは奉公に出たけど上手くいなくて、今度、金木の商人のところへ働く事になったの。」
ユキ	「仁太郎さん、ユキです。」	「ユキさん？ユキさんがどうしてここへ。」
仁太郎	「ユキさん？ユキさんがどうしてここへ。」	「ユキさん？ユキさんがどうしてここへ。」

9 1		8 8
<p>一本花を摘むユキ。花を見つめて。</p>	<p>立ち止まり、そばの花の横に腰を下ろすユキ。</p>	<p>うつむく仁太郎。</p> <p>(二人で外を歩く)</p> <p>咲き誇るそばの花。一面に広がっている。</p> <p>仁太郎の手を引き歩くユキ。</p>
<p>仁太郎</p> <p>「でも何とか生きてるよ。お松さんや留吉さんのお世話になりながら。」</p>	<p>ユキ</p> <p>「ちよつとした風邪がもとだったの。でも、仁太郎さんこそお父さんが亡くなって大変だったんですね。」</p>	<p>仁太郎</p> <p>「そうだったんですか……。」</p> <p>仁太郎</p> <p>「たまなさん、もういないのか……。」</p>

105	104	96	95	94	93	92
翹屋の店内。障子越しの奥には明	夜、翹屋の看板。		微笑するユキ。	話をその場で切る感じでユキが立ち上がり、	仁太郎、一瞬（ん？）となるが顔を伏せる。	ユキの背中、花を軽くまわす。 — 間 —
		仁太郎	ユキ	ユキ	ユキ	ユキ
		「俺はずりつと一人ぼっちだったから・・・。」	「そんな事考えもしなかったよ。」	「仁太郎さん、寂しくない？」	「母さんがね、いつも気にしてたよ。仁太郎さんの事。」	
					OFF「仁太郎さんの三味線は、年と共に良くなるって言った。」	

1 1 1		1 1 0	1 0 9	1 0 8		1 0 7	1 0 6	
<p>どこかに目線をやって、再びもとに戻る。</p>	<p>ものが浮かび上がっている。</p> <p>紙にはうっすらと文字のようなものがある。</p> <p>プレス板はもとに戻る。</p> <p>プレスされる紙。</p> <p>紙が置かれた台が、プレス板の下に移動する。</p>		<p>奥の土蔵</p> <p>ランプ、手前に広げられた洋書。</p>			<p>(店の奥) 酒樽が並んでいる。</p>		<p>かりが見えるが、店の光は消えている。</p>
<p style="text-align: center;">S E : : ガチャツ。</p>								



1 1 5	<p>菊之助の方へ歩き出す父。</p> <p>反対側を見る父。</p> <p>室内に入ってくる父。なんとなく 手持ち無沙汰の父親。</p> <p>菊之助。 後ろを振り向くとそこに父親が 立っていた。 体を父親の方に向ける菊之助。</p>	<p>父</p> <p>父</p> <p>父</p> <p>菊之助</p> <p>「お前は家業を継ぐ勉強をするために 東京へ行ったのではないのか？」</p> <p>「ところで菊之助。」</p> <p>「いや…。」</p> <p>「どうしたんですか、父さん。」</p> <p>SE…戸の開く音。</p>
1 1 4	<p>その音に気付き、後ろを振り向く 菊之助。</p>	
1 1 3	<p>インクボールをクルクル回すよ うに紙の上を滑らせる。</p>	
1 1 2		

1 2 1	1 1 9	1 1 8	1 1 7	1 1 6	1 1 6
一面雪。 ゆつくりと雪が降り始める。	助。 菊之助の父ナメ、立ち尽くす菊之助。	視線を父からはなす菊之助。		少し強い口調で	何かを踏んだ音に気付く父。 床一面にプリントミスの紙が散乱している。
	菊之助 「はい、解っています。」	父 「少しは家の事も考えてくれないか。」	父 「そう、その活版印刷機をいじってばかりいるではないか。」	菊之助 「活版印刷機ですか？」	父 「しかし、帰ってきてからのお前はどうか。 外ばかり出歩いて、たまに家にいると思えば 蔵にこもって、えー、なんだほら、そのー。」  S E : グシヤツ。

1 2 9	1 2 8	1 2 7	1 2 6	1 2 5	1 2 4	1 2 3	1 2 2
助。 仁太郎の三味線を聞き入る菊之助。	仁太郎達を見下ろせる小高いところより、見ている菊之助。	その中にユキ、留吉、お松も聴きに来ている。	村人達に三味線を聞かせる仁太郎。	桜の木の枝。桜が咲いている。	雪どけ。 雪がくずれ、川へと流れていく。	雪の中、家々をまわっていく仁太郎。	雪の中、門付けをする仁太郎。 家の人がソデに米を入れる。 頭を下げ、再び力強く三味線を弾く仁太郎。
●。							

1 3 8	<p>さなぶりの太鼓UP</p> <p>田畑の畦道。</p> <p>さなぶりの旗を立ててお祝いをしている人々。</p> <p>太鼓を叩き、笛を吹く男達。</p> <p>振り上げられる旗。</p> <p>衣装を着、踊る村人。</p> <p>ちいさな寺の山門。数人の村人が出入りしている。</p> <p>仁太郎の三味線UP。</p> <p>仁太郎が三味線を弾いている。</p> <p>横に留吉が立っている。</p> <p>ボサマ5人ぐらいで門付けをしている。</p> <p>人々に向かって大きく声を張り上げていくボサマA。</p>	<p>ボサマA</p> <p>「さあさあ、われらの三味線は正真正銘のボサマの三味線。」</p>
-------------	---	---

1 4 2	仁太郎の三味線の音をかき消そ	
1 4 1	仁太郎、うなずくと叩くように激しく弾き始める。	
1 4 1	ボサマ達の方へと向かう。	ボサマ A 「邪道の芸は耳には新しいけど、仏のありがたみは聞こえてこないよ。」
1 4 0	ボサマ達の方に何人かの客が集まっていく。	留吉 「何を言うか。 正当だの邪道だのと、三味線の音にオキテはないはずだ。 そんなに言うのならその邪道の三味線で 客を取り戻そうぜ！仁太郎！」
1 3 9	仁太郎の三味線を聞いていた客、顔を見合わせ	

1 5 1	1 5 0	1 4 9	1 4 8	1 4 7	1 4 6	1 4 5	1 4 4	1 4 3	
冷めた表情で見ている田原坊。	田原坊なめボサマ達。	坊。	お付きの者と見に来ている田原坊。	田原坊の足が in する。	坊様より奥に見える仁太郎。 (ん?!) とそちらを見る。	激しく鳴り響く三味線の音に	会話をしている住職たち。 つめる菊之助。	仁太郎の弾き方を、不安そうに見	さら
									うと、力強く弾き始めるボサマ達。 三味線を弾きあう、仁太郎とボサマ達。 さらに激しく三味線を弾く仁太郎。

1 6 1	1 6 0	1 5 9	1 5 8	1 5 7	1 5 6	1 5 5	1 5 4	1 5 3	1 5 2	
は笑みが。 三味線を弾く仁太郎。その表情に	えなくなる。 ボサマ達の三味線の音が突然聞	明るくなる。 弾き続ける仁太郎の顔がぱっと	激しく弦を撥で弾く。	激しく動く指。	じつと聞いている田原坊。	客ナメ仁太郎。	奥で三味線を弾く仁太郎。	原坊。 バツ！とそちらに顔をむける田	仁太郎の三味線、インサート。	(ボサマの三味線にあまり関心 なさそう)
<p>田原坊</p> <p>「あれが仁太郎の音か。」</p>										

1 7 2	1 7 1	1 7 0	1 6 9	1 6 8	1 6 7	1 6 5	1 6 4	1 6 3
うつつむく仁太郎。	心配そうに見つめる菊之助。	コソコソと話している。	仁太郎の演奏を聞いていた客達、 うに見る留吉。	ボサマ達が弾く音が戻ってくる。 手の止まっている仁太郎。心配そ うに見る留吉。	弦もろとも三味線の皮を破いて しまう。	さらに激しく撥で弦を弾くが、 な気持になる仁太郎。	自分の求めた何かがつかめそう 激しく動く指。	仁太郎、三味線UP。 三味線を弾く仁太郎よりイメー ジBGへOLと共に仁太郎以外。
●								



<p>178 177 176</p>	<p>174 173</p>	<p>夕景、鐘つき堂の前でふさぎ込む 仁太郎達。 ふさぎ込んでいる一同。 破れた三味線をかかえる仁太郎。 そこへやってくる住職。</p>	<p>仁太郎の演奏を聞いていた人達 が、次々とその場を立ち去って いく。 悔しさにくちびるをかみしめる 仁太郎。 仁太郎の演奏を聞いていた田原 坊。 チラリと付き人に顔を向ける。 うなづく付き人。 田原坊の手を取り、その場に背を 向ける。</p>	<p>田原坊 「音は聞いた。さあ行こうか。」</p>
----------------------------	--------------------	--	---	--------------------------------

186	185	184	183	182	181	180	179
住職、自分の湯飲みを取り、	体を起こす住職。		職。 急須を置き、三人に茶を振舞う重	太郎達。湯飲みに注がれるお茶。	本堂の中、仏像の前に招かれた仁	湯呑に注がれるお茶。	本堂の仏像UP。 ニッコリと微笑する住職。
住職	仁太郎	住職	仁太郎	住職	仁太郎	住職	留吉 菊之助
「しかし、今日の演奏は少々乱暴すぎたのう。」	「いえ、まだまだ未熟です。」	「力強い演奏で、なかなか評判がいいようじゃな。」	「ありがとうございます。」	「仁太郎、いつも演奏は聞かせてもらっていたぞ。」		「住職。」	「よかったら茶でも飲んでいかんか？」 「和尚…。」

190	うつむく仁太郎。	菊之助 「そうは言っても・・・。」 「とにかく、三味線がないんじや話にならねええ。早いとこ何とかしないと。」 「じゃが、皮を張り直しても、今日のような弾き方をすれば同仕事。」 「確かに…。」
189	仁太郎を見る菊之助。	仁太郎 「でも、お客さんをびっくりさせようとすると、あのくらい強く弾かないと…。」
188	仁太郎を見ている留吉。	菊之助 「任職のおっしゃるとおり、今日の弾き方はちょっと乱暴過ぎたんじやないかな。」
187	傍らに、皮の破れた三味線。 住職、お茶を飲む。	仁太郎 ○「自分の思いをぶつけた演奏がやっとできそうだったのに、 いったい、どうしたらいいんだ？」

195	194	194	193	192	191
住職、再びすずりに筆をつけて	紙に『守』という字を書く。	筆に墨汁をつけ、		うつむく仁太郎ナメ住職。	
菊之助	住職	住職	菊之助 留吉 仁太郎	住職	仁太郎
「シュ。」	「習ったとおりに技を磨き、弾き続けるのが『守』の時期。」	「例えば三味線を弾く時、」	「そのシュハリとは、どのような意味があるんですか。」 「何だ、それは？」 「シュ・ハ・リ？」	「仁太郎、お前は守破離という言葉聞いた事があるかな？」 「シュ・ハ・リ？」	「この頃、一生懸命弾いていてもどうしても上手くないかない・・・。」 「思い切って弾こうとすると弦が切れてしまうし。」 「オレはどうしたら・・・。」

201	紙に書かれた『守破離』の文字。	
200	腕を組む留吉。住職、紙を差し出す。	留吉 「へえ。シュハリねえ。」
199	筆を置く住職。	菊之助 「シュ・ハ・リの『リ』。」
198	紙に書かれる『離』の文字。	住職 「離の時期を迎えているのかもしれない。」
197	文字を書き続ける住職。	住職 「仁太郎は、全く新しい自分の音を作り上げる。」
196	『破』という字を書く。	菊之助 「ハ。」 住職 「そして今、」
		住職 「破。」
		住職 「自分なりに改良をして、少し自分の色を出す。つまり今の状態が、」

202	紙をのぞき込むように見ている菊之助。	
202	留吉を見る菊之助。	菊之助 「そうだったんですか…住職の言いたかった事って。」
203		留吉 off 「何がだ？」
204	住職、うなずき、	菊之助 「いいですか、留吉さん。」
205	仁太郎、かみしめるように仁太郎を見る菊之助。	菊之助 「仁太郎さんの弾き方は今、新たな段階へと上がっていきこうとしているんですよ。それは今の三味線には合わなくなってきたという事なんです。」
		住職 「いかにも。」
		仁太郎 「三味線が合わない？」
		菊之助 「弦を叩くような弾き方に負けない三味線があればいいんだ。」

209	208	207	206
力強く答える菊之助。	決心の表情を浮かべる仁太郎。		
<p>留吉 配心。」</p> <p>「あの、俺も連れてってもらえますか。こいつ一人だと心</p>	<p>菊之助</p> <p>「決まった。」</p>	<p>仁太郎</p> <p>「本当ですか。俺はお客さんの心をとらえるような三味線を弾きたい。もしそれができるのなら…どこへでも行きます。」</p>	<p>仁太郎</p> <p>「叩くように弾いても、弦が切れない三味線なんて、どこにもない。」</p> <p>菊之助</p> <p>「仁太郎さん、一度、弘前の茂森座に行ってみませんか。」</p> <p>仁太郎</p> <p>「弘前の茂森座？」</p> <p>菊之助</p> <p>「そう。人形浄瑠璃の義太夫の太棹と呼ばれる三味線が、確か弦を叩くかのごとく激しく弾くと聞きます。もしかしたら、これからの仁太郎さんの弾き方に何か通じるものがあるかも知れません。」</p>

2 2 0	2 1 9	2 1 8		2 1 7	2 1 6	2 1 5	2 1 4	2 1 3	2 1 2	2 1 1	2 1 0
<p>人形浄瑠璃の舞台。『南総里見八 三味線の演奏者達。 激しく弾く三味線（太棹）。</p>				<p>立ち止まり、 やって来る仁太郎達。 と集まって来ている人達。 茂森座の入り口前、部隊を見よう</p>			<p>ネプタを引く人々。 何本もの幟。 町中をねりあるくネプタ。</p>			<p>ニッコリと三人を見守る住職。</p>	
			<p>留吉 菊之助</p>				<p>菊之助 「さすがに弘前のネプタはにぎやかですねえ。」</p>			<p>菊之助 OFF「ええ。もちろん。」</p>	
			<p>「茂森座って、でけーな。」 「さあ、入りましょう。」</p>								



	2 2 2	2 2 2	2 2 3	2 2 4	2 2 5
<p>犬伝』。</p> <p>庭で戯れる伏姫と八房。部屋より それを見守る安西景連。</p> <p>義太夫の説教節。</p> <p>短刀を自らののどに突こうとし ている伏姫。</p> <p>八房を銃で狙う金碗大輔と義実。 誤って大輔の撃った弾が、八房だ けでなく</p> <p>伏姫も打ち抜いてしまう。</p> <p>舞台を見る仁太郎達。</p> <p>犬塚信乃、顔UP。</p> <p>犬塚信乃、犬飼現八との芳流閣の 決闘。</p> <p>刀を交わす2人。</p>					

2 3 5	2 3 4	2 3 3	2 3 2	2 3 1	2 3 0	2 2 9	2 2 8	2 2 7	2 2 6
<p>耳をかたむけて聞く仁太郎。  三味線を演奏する奏者達。  ポーズを決める犬塚信乃と犬飼現八。  舞い始める紙ふうき。  次々に姿を現す八剣士。  観客からドツと拍手歓声がかかる。  茂森座、だんだんと盛り上がってくる義太夫。  舞台の上で舞うように、剣士の攻撃をかわす姫の人形。  三味線、さらに激しく。  姫の人形の顔が一瞬にして鬼に変わる。  感激して仁太郎も拍手する。</p>									

2 4 1	2 4 0	2 3 9	2 3 8	2 3 7	2 3 6
<p>仁太郎、顔UP。</p> <p>夕景。</p> <p>岩木川。</p> <p>両岸には夏草が繁り、鳥のさえずりが聞こえる。</p> <p>弘前から下流に流れてくる仁太郎の舟。</p> <p>舟を漕ぐ留吉。</p> <p>留吉を見る菊之助。</p> <p>仁太郎を見る菊之助。</p>					
<p>留吉</p> <p>「義太夫の三味線は迫力があるね。」</p> <p>留吉</p> <p>「あれが、太棹というんです。」</p> <p>菊之助</p> <p>「俺、感動しました。あんな三味線があったんですね。」</p> <p>仁太郎</p> <p>「私は仁太郎さんの弾き方には、あの太棹の方があっていると思うのですが。」</p> <p>菊之助</p> <p>「棹が大きくなるだけでなく、弦も胴も大きくなってるんですよ。」</p>					

<p>2 4 7</p>	<p>2 4 6</p>	<p>2 4 5</p> <p>2 4 4</p>	<p>2 4 3</p>	<p>2 4 2</p>
<p>ユキ。 松屋の中、思案するお松・留吉・ ユキ。</p>			<p>舟を漕いでいる留吉。  目線を仁太郎に戻す菊之助。</p>	
<p>ユキ</p> <p>「そうなんですか。私も力になりたいけど、 どうすることもできないわ。」</p>	<p>お松</p> <p>「でも、値段が高くてねエ。留吉と私でお金を工面しても 全然足りなくて…。」</p>	<p>留吉</p> <p>「オレとお松さんで手分けしてみ、見つけるには見つけ ただけど。」</p>	<p>ユキ</p> <p>「で、どうでした？三味線の方は？」</p>	<p>菊之助</p> <p>「義太夫では伴奏に使っているのですが、仁太郎さん なら独奏でも十分弾けると思いますよ。」</p> <p>仁太郎</p> <p>「独奏と伴奏とは違います。本当に弾けるかどうか…。 それに、今の俺にはとてもじゃないけど 太棹の三味線なんて…。」</p>

2 4 9	何か心に決める留吉。	お松 「仁太郎も、一生懸命、笛で門付けをしてるみたいだけどね。」 お松 「本当に困ったねエ。どうにかならないもんかねエ。」
2 5 0	麹屋内、酒蔵。燃えるローソク。 樽のある場所。	留吉 「虫のいい話だつてことは承知の上でのお願いです。 菊之助さん、仁太郎の新しい三味線を買うのに力を貸して下さい。」
2 5 2	振り向き、留吉を見る菊之助。  体ごと留吉の方を向く。	菊之助 「留吉さん、聞いてください。私は間もなくこの村を離れます。」 留吉 「えっ!？」 菊之助 「そうになると、郷里のために何もできません。 そこで仁太郎さんには私の代わりに郷里の役にたつて欲しいと思っています。」

<p>2 6 1</p> <p>2 6 0</p> <p>2 5 9</p> <p>2 5 8</p> <p>2 5 7</p>	<p>2 5 6</p> <p>2 5 5</p> <p>2 5 4</p>
<p>横で笛を吹く仁太郎。留吉は舟の人達。</p> <p>船着き場、収穫の俵積みをする村。</p> <p>刈った稲をしばる人。</p> <p>木で作ったやぐらに稲穂をかける。</p> <p>刈り入れられる稲穂。</p> <p>神原村、稲の刈り入れ。</p>	<p>うなづく菊之助。</p>
	<p>菊之助</p> <p>「もちろんです。喜んで。」</p> <p>留吉</p> <p>「だったら、力になってくれるんですね。」</p> <p>菊之助</p> <p>「そのためには仁太郎さんには新しい三味線が必要ですね。」</p> <p>菊之助</p> <p>「仁太郎さんにはこの地の、目を悪くした子供たちに三味線を教えてもらいたいのです。」</p> <p>留吉</p> <p>「というと？」</p>

2 6 8	2 6 7	2 6 6	2 6 5	2 6 4	2 6 4	2 6 3	2 6 2
菊之助。奥にあったはずの印刷機	書き物をしている菊之助、手元。	なぜか素直に喜べない仁太郎。					
		仁太郎	留吉	仁太郎	留吉		
		「ああ…。」	「よかったな、仁太郎。」	「うん。やっぱり三味線がないと、俺、本当の門付けができないなあ。」	「仁太郎。菊之助さんが三味線のことばまかせろ、と言ってくれたんだよ。これでまたすぐに三味線が弾けるぞ。」		





281	しんしんと降る雪。仁太郎の家。	
280	顔を横に振る仁太郎。	ユキ 「……。」
279	赤ちゃんをおんぶしているユキ。	仁太郎 「今の俺には新しい三味線を買う金なんて、とてもじゃないけど……。」
278	荷箱に座っている仁太郎。	ユキ 「よかったじゃない。」
277	ユキが奉仕をしている後藤屋。	仁太郎 ユキ 「それでどうなったの、三味線の方は。」 「今、菊之助さんが今三味線を作る交渉をしてくれているらしいんだけど。」
276	――間――	菊之助 「当道座の連中をしのぐ本物のボサマになると思うのです。私は、彼に、この地の目の不自由な子供たちの希望の星になってもらいたいと思っています。」

2 8 8	2 8 7	2 8 6	2 8 5	2 8 4	2 8 2	2 8 2
	いる菊之助。 雪の降る中、太棹を抱えて立っ つた菊之助が立っていた。 すると戸の前にはマントを羽織 戸を開ける仁太郎。	顔を少し上げる仁太郎。 雪が降り積もる、仁太郎の家の戸 の表側。	木槌を振り上げた所で、なぜか体 の動きを止める仁太郎。	ワラをたたいてもみほぐしてい る仁太郎。	囲炉裏UP。	
仁太郎	菊之助					
外は寒いでしょう。どうぞ中へお入り下さい。」	「仁太郎さん、やっと出来ましたよ。」 「菊之助さん。」					
				SE：トントントン（木槌UP）		

2 9 3	<p>家の中へ菊之助を招き入れる仁太郎。</p> <p>仁太郎の家の中に入る菊之助。</p> <p>戸を閉める仁太郎。</p> <p>囲炉裏のUP。</p> <p>仁太郎の方を見る菊之助。</p> <p>三味線を持ち替えて</p> <p>仁太郎の手が画面に入ってきて、三味線を手にする。</p> <p>その時うまく仁太郎が手に出来るように、菊之助が補助をする。</p>	<p>仁太郎</p> <p>「なんて重い三味線なんだ。これが太棹なんですな。」</p>
2 9 2	<p>菊之助</p> <p>「それより、これを受け取ってください。」</p>	<p>菊之助</p> <p>「いえ、お構いなく。」</p>
2 9 1	<p>仁太郎</p> <p>「菊之助さん、何も無いですけど白湯（さゆ）もどうですか。」</p>	<p>仁太郎</p> <p>「菊之助さん、何も無いですけど白湯（さゆ）もどうですか。」</p>
2 9 0	<p>菊之助</p> <p>「おじゃまします。」</p>	<p>菊之助</p> <p>「おじゃまします。」</p>
2 8 9	<p>仁太郎</p> <p>「おじゃまします。」</p>	<p>仁太郎</p> <p>「おじゃまします。」</p>

294	菊之助に頭を下げる仁太郎。	<p>菊之助 「ええ、でも仁太郎さんならすぐにも使いなせると思います。」</p> <p>仁太郎 「いえ、とんでもない・・・でも、何とお礼を申し上げたらいいのか・・・。」</p> <p>菊之助 「いやあ、大げさですよ。仁太郎さん。」</p>
296	舟の渡し場で待っている客達。 お松が画面にIN。	<p>お松 「さあさあ、みんな集まっとくれ。」</p> <p>仁太郎の新しい三味線ができたのよ。」</p>
297	立ち止まり、みんなに声をかける お松。 集まってくる人達。	<p>村人A 「仁太郎の三味線を聞けないと、やっぱり寂しいよ。」</p> <p>村人B 「そうそう。仁太郎の三味線が聞けねえと、仕事に活気がでねえって。」</p>
299		<p>ユキ 「仁太郎さん、三味線を皆さんの前で弾いてみる？」</p>

307	306	305	304	303	302	301	300
三味線を弾く仁太郎。	力強く三味線を弾く仁太郎。	太棹の力強い音が響き渡る。	める仁太郎。息づかい。	大きく息をはき、三味線を弾き始める仁太郎。	調整する仁太郎。	箱のような物に腰を下ろし、糸を調整する仁太郎。	仁太郎の三味線に期待する一同。
						少しためらいつつも、うなづく仁太郎。	自信なさそうに答える仁太郎。
							仁太郎
							「まだ新しい太棹に慣れてないけど少しだけなら。」
							留吉
							「せっかくこうして皆が集まってんだぜ。
							聞かせてくれよ。お前の新しい三味線ってやつをさ。」
							商人 A
							「そうだよ、仁太郎。少しだけでも聞かせてくれよ。」
							村人 B
							「やってくれよ。」
							仁太郎
							「ああ…。」

308	びつくりする一同。	
309	えっ?となった表情を浮かべる留吉やユキ。	
310	少し弾き、はげしくなったところでリズムがとれず、三味線を弾く手を止める。	
311	顔を見合わせる村人達。	
312	少し顔を下げる仁太郎。	仁太郎 「だめだ、くそっ。」
313	散り散りに立ち去っていく客達。	○○ 「まだムリだよな。」
314	くちびるをかみしめる仁太郎。	仁太郎 「どうしても、うまくいかない。」
心配そうに仁太郎を見つめるユキ。	ユキ 「仁太郎さん。」	

3 2 0	うつむく仁太郎。	留吉 仁太郎 留吉 仁太郎	「勝手にしろ！」
3 1 8		留吉 仁太郎	「じゃあ、何で途中でやめちゃうんだよ。」 「何かが違うんだ……。」
3 1 7	答えない仁太郎。	留吉	「せっかく村のみんながお前の為に集まってくれた っていうのに、人の度肝を抜くような三味線を 弾いてみせるって言ったじゃないか！」 「それはそうだけど……しかも稽古は前より やってるんだけど。」
3 1 5	寺の鐘つき堂、夕景。	留吉	OFF 「仁太郎、どうしたっていうんだ。」

3 2 1	背を向け立ち去る留吉。	仁太郎 「留吉さん…。」
3 2 3	ちよつと体を浮かす仁太郎。 腰を下ろし、力無く肩を下ろす仁太郎。 何日か後の夕方、同じ場所。鍾つき堂。	住職 「どうだ、稽古は進んでいるかな。」
3 2 4	ん？と声の方に耳を傾ける仁太郎。	仁太郎 「和尚。」
3 2 5	立っている住職。	仁太郎 住職 「何かオカシイのです。 前よりも稽古しているのに、調子がでないのです。」 「……。」 「何か根本的に修行しなさいと、



3 2 6	三味線を見る仁太郎。  仁太郎うなずき	住職  「修行……。」  「はい。今の俺を根底から変えるような そんな修行の場が欲しい。」  「そこまで考えておるのか。ならばひとつ 心当たりがあるのじゃが。」  「本当ですか？ いったいそれは何なんです？」
3 2 7	ガバツ！と住職へ顔をむける仁 太郎。	仁太郎  「イタコの修行じゃ。」  「イタコ？ イタコって、目を悪くした 女の祈祷師のことですか。」  「いかにも。イタコの修行はボサマの修行より何倍も 厳しいと聞いている。それでも仁太郎、耐えられるかな。」
3 2 8	三味線をおいて立ち上がる仁太	住職  「イタコの修行じゃ。」  「イタコ？ イタコって、目を悪くした 女の祈祷師のことですか。」  「いかにも。イタコの修行はボサマの修行より何倍も 厳しいと聞いている。それでも仁太郎、耐えられるかな。」
3 2 9		

3 3 3	3 3 2	3 3 1	3 3 0
沈み行く太陽。	深々と頭を下げる仁太郎。	うなづく住職。	郎。   間
	仁太郎	住職 「わかった。では川倉地蔵尊に行ってみるか。」 「はい、つれて行って下さい。」	仁太郎 「やります。俺、イタコの修行をします！」

C	7 6 5 4 3 2 1
画面	<p>【Cパート】</p> <p>雪が深々と降っている。 古寺、賽の河原地蔵尊。 回転している風車。 雪が降っている中、風車が回っている。 川倉地蔵尊の小道、 無数の風車が回っている。 風車の回っている音が辺り一面に響いている。 川倉地蔵尊の側のある開けた林の中に幾つかの小屋があり、その中でイタコ達が口寄せをしている。 中央にイタコが一人。 狭い小屋の中で口寄せをしている</p>
音声	

1 2	1 1	1 0	9	8
<p>るイタコ。 その回りを4人ぐらいの客が涙 ながらに聞いている。 仁太郎と住職IN。</p>				
<p>イタコ 仁太郎 イタコ 仁太郎 イタコ 仁太郎</p>	<p>イタコ 仁太郎 イタコ 仁太郎 イタコ 仁太郎</p>	<p>目線をイタコ達に戻す住職。</p>	<p>住職 仁太郎 住職</p>	<p>「どうじゃ仁太郎聞こえるか？これは口寄せと 言ってイタコが死者をこの世に 呼び寄せているところじゃ。」 「それでは、かあちゃんにも会えるんですか？」 「では頼んでみるかの。」</p>
<p>イタコ</p>	<p>「あ、わかった。」</p>			

1 6	1 5	1 4	1 3
<p>ぬが現れてくる。 イタコの後方に仁太郎の母おき</p>	<p>少し前へのり出す仁太郎。</p>	<p>突然仁太郎を呼ぶ声。 徐々にイタコの声が小さくなり、 グツと頭を下げるイタコ。 そして呪文らしきものを唱え始 める（この声大きく）。</p>	<p>イタコ、少し頭を下げる。 イタコの胸元、数珠を持った手を 胸元まで持ってきて2回ほどこ すりあわせる。</p>
<p>仁太郎 「母ちゃん、母ちゃんなのか。」</p>	<p>イタコ 「仁太郎：、仁太郎、元気でやってるかい（イタコの声、 少し若い）。」</p>	<p>イタコ 「ブツブツ……。」</p>	

20		おきぬ
19		仁太郎
18		おきぬ
17		仁太郎
	<p>(イタコの声とおきぬの声が入 れ替わっていく)</p>	おきぬ
		<p>「ああ、私だよ。 仁太郎や、お前にはさびしい思いをさせて すまなかつたねえ。 でも、一人でもちゃんと、立派に生きているんだねえ。」</p>
		<p>「母ちゃん、すみません。俺を産んだばかりに早く死な せてしまつて。」</p>
		<p>「いいえ、仁太郎。私はね、あなたを産んだことで 生きた甲斐があつたんだよ。 でも、お前はこうしてここへ来たんだい？」</p>
		<p>「父ちゃんと、三味線を弾いて生きていくつて 約束したんだけど、うまくいかなかつて…。 それに母ちゃんの三味線も破いてしまい (体に力が入る仁太郎)。」</p>
		<p>「そんな事は気にしなくていいんだよ。それに新しい三味</p>

2 1	見えない目を母親の方へ向ける 仁太郎。	線が来たんだろう。」
2 2	やさしい表情のおきぬ。	仁太郎 「太棹をいただいたんだ。でも弾きこなせないんだ。」
2 3	さらに前へのり出す仁太郎。	おきぬ 「大丈夫。あなたは人を楽しませる為に生まれてきたんだよ。 努力をすれば必ずうまくいくよ。」
2 4	苦しんでいる息子に対して何もしてやれない母親である自分という悲し気な表情。 ――間―― 顔を下げのおきぬ。	仁太郎 「母ちゃん、オレ…。」 おきぬ 「私はなんの手助けもしてあげられないけれど」

29	28	27	26	25
川倉地蔵尊の近くのスイレンの	泣いている仁太郎。見守る住職。	涙を流している仁太郎。	徐々におきぬの姿が消えていく。	顔を上げるとやさしい表情のおきぬ。 （辛い気持ちをガマンしている表情）
		仁太郎 「母ちゃん、ありがとう。」	おきぬ 「……いつでもあなたを見守っているからね。」	……いつも。」



3 4	3 3	3 2	3 1	3 0
<p>池に住職と仁太郎が立っている。 仁太郎を見る住職。</p> <p>正面に顔を戻して話し出す住職。</p> <p>(イタコが念仏を唱えている、寄り)</p> <p>(イタコが念仏を唱えている、バ ストシヨット)</p>				
<p>住職</p> <p>「何度となく気が遠くなるのを冷水をかぶって耐えつづけ、そのうちに無我の境地に達する。」</p> <p>住職</p> <p>「イタコの修行は厳しいぞ。七日七晩食を絶ち、不眠不休で念仏を唱えつづける、命懸けの修行なんじゃ。」</p> <p>仁太郎</p> <p>「どうじゃった、仁太郎。」</p> <p>「和尚、どのような修行をすればあんな事ができるようになるんですか。」</p>				

<p>40</p>	<p>39</p> <p>38</p> <p>37</p>	<p>36</p> <p>35</p>
<p>あずさ弓を弾いている仁太郎。 がらお経を唱えている仁太郎。 炎を前にして、あずさ弓を弾きな 祈禱所本堂内部。 イタコ祈禱所本堂。 イタコ祈禱所本堂。ロング。</p>	<p>突然、仁太郎の周りに風が舞い上 がる。</p>	<p>仁太郎を見る住職。 奥にはスイレンの池。</p>
	<p>住職</p> <p>「そこまでの覚悟があるのなら、よし、案内しよう。」</p> <p>俺は命がけで修行をするつもりです。」</p>	<p>その時初めて仏が降りてくるのじゃ。」</p> <p>住職</p> <p>「どうじゃ、仁太郎。それでも修行をするか？」</p> <p>仁太郎</p> <p>「和尚、俺がたまなさんに三味線を習って以来、 三味線は俺の命です。 この三味線で本物の演奏が出来るまで</p>

5 1	5 0	4 9		4 8	4 7	4 6	4 5		4 4	4 3	4 2	4 1
<p>修行中の仁太郎。</p> <p>仁太郎顔UP。</p> <p>頭から水をかぶる仁太郎。</p> <p>井戸で水をかぶっている仁太郎。</p> <p>再び水をかぶっている仁太郎。</p> <p>再び水を汲もうとする仁太郎。</p> <p>次の桶を引き上げている仁太郎。</p> <p>その側にイタコが立っている。</p> <p>イタコのおババが立っている。</p> <p>再び、水をかぶる仁太郎。</p> <p>だいぶ雪が積もっている仁太郎の家。</p> <p>その前に着ごぎをまとったユキがたたずんでいる。</p> <p>どこか淋しげなユキ。</p> <p>寂しげなユキの顔UP。</p> <p>呪文を唱えつづけている仁太郎</p>												

6 1	6 0	5 9	5 8	5 7	5 6	5 5	5 4	5 3	5 2
<p>の表情。</p> <p>呪文を唱えつづけている仁太郎の正面。</p> <p>雪に覆われた山々。</p> <p>岩上で三味線を弾く仁太郎UP。</p> <p>岩上で三味線を弾く仁太郎ロング。</p> <p>イタコの祈祷所本堂の岩の上で三味線を弾いている仁太郎。</p> <p>津軽のある浜辺、横なぐりの吹雪。</p> <p>津軽の日本海、荒れている海。</p> <p>波打ち際のある岩の上で仁太郎が三味線を弾いている。</p> <p>激しく三味線を弾いている。</p> <p>三味線UP。</p>									

7 6	7 5	7 4	7 3	7 2	7 1	7 0	6 9	6 8	6 7	6 6	6 5	6 4	6 3	6 2
<p>仁太郎正面UP。</p> <p>仁太郎横UP。</p> <p>仁太郎後ろ姿UP。</p> <p>仁太郎ロング。</p> <p>徐々に弾き方が激しくなってくる仁太郎。</p> <p>三味線UP。</p> <p>棹の上から下へ動く指には血がにじむ。</p> <p>頭を軽く振る感じで</p> <p>画面いっぱいに激しい手の動き。</p> <p>激しく弦を弾く仁太郎。</p> <p>気を失いかける仁太郎。</p> <p>右手をつく仁太郎。</p> <p>なんとかかふんばる。</p> <p>バチを握り直す仁太郎。</p> <p>なんとか体勢を元に戻し、再び三</p>														

7 8	<p>味線を弾き始める仁太郎。</p> <p>仁太郎の後ろにイタコの姿が現れてくる。</p> <p>セリフに合わせて消えていくイタコ。</p> <p>仁太郎の顔UPイメージ世界へOL。</p>	<p>イタコ ○FF 「何をしている仁太郎。もう少しじゃ、もう少しでお前の心は開かれる。」</p> <p>イタコ ○FF 「全てを生んでくれた母なる大地、四季折々の美しい自然、そしてそこに生きている人々の喜怒哀楽が三本の弦を通じて新しい音色となってこの世に生まれ変わるのだ。もう少しじゃ、心のおもむくままに三味線がひとりで音を奏で始めるのは……。」</p>
7 7	<p>味線を弾き始める仁太郎。</p> <p>仁太郎の後ろにイタコの姿が現れてくる。</p>	<p>イタコ ○FF 「全てを生んでくれた母なる大地、四季折々の美しい自然、そしてそこに生きている人々の喜怒哀楽が三本の弦を通じて新しい音色となってこの世に生まれ変わるのだ。もう少しじゃ、心のおもむくままに三味線がひとりで音を奏で始めるのは……。」</p>

8 6	8 5	8 4	8 3	8 2	8 1	8 0	7 9
顔を上げる仁太郎。							
顔を下げる仁太郎。							
少し顔を上げる仁太郎。							
母おきぬが横に立っている。							
おきぬ顔UP。							
続いてたまなが現れる。							
そして三太郎が現れる。							
仁太郎	たまな	おきぬ	仁太郎	おきぬ	仁太郎	仁太郎	仁太郎
「たまなさん。」	「そして大地の息吹を。」	「津軽の自然。」	「母ちゃん。」	「あなたはもう感じているはずですよ。」	「はー本当に静かだ。しかしなんだこの気持ちは。」	「ここは一体どこなんだ？」	「ん？どうしたんだ。何も聞こえない。憎しみや怒り、痛みも何も感じなくなつた。オレは一体どうしたんだ。でも」

9 3 B	9 3 A	9 2	9 1	9 0	8 9	8 8	8 7
<p>朝日が昇ってくる。</p> <p>徐々に切れ間から空が見える。</p> <p>雲の切れ間が出来てくる。</p> <p>徐々に吹雪がやんでくる。</p> <p>三味線を弾き続ける仁太郎。</p> <p>イメージ世界から現実へOL。</p> <p>消えていく父。</p> <p>消えていくたまな。</p> <p>消えていく母。</p> <p>の周りに立っている。</p> <p>おきぬ、たまな、三太郎が仁太郎</p>							
<p>三太郎 「そこに生きる人々の思い。」</p> <p>仁太郎 「父ちゃん。」</p> <p>おきぬ 「頑張って仁太郎。」</p> <p>たまな 「もうあなたにも届いています。」</p> <p>三太郎 「みんなの待っている声が。」</p> <p>仁太郎 n 「ありがとう、みんな。」</p>							



<p>101</p>	<p>そして振り向くユキ。</p> <p>足音に気付いたユキが顔を上げる。</p>	
<p>99</p>	<p>引き戸の前に立っているユキ。</p>	
<p>98</p>	<p>まだ屋根に雪が残っている仁太郎の家。</p>	
<p>97</p>	<p>雪解け水が流れ込んでいる。</p>	
<p>96</p>	<p>雪の間から小さな黄色い花がさいている。</p>	
<p>95B</p>	<p>雪解けの季節。</p>	
<p>95A</p>	<p>先ほどに比べると、おだやかな海になっている。</p>	
<p>94</p>	<p>徐々に陽射しの数が増え、仁太郎に陽射しが差し込む。</p>	

108	107	106	105	104	103	102
どこかの民家。	る。 〓	山間。霧がたちこめている。●。 〓かすかに三味線の音が聞こえる。 〓	泣いてしまうユキ。 仁太郎に駆寄るユキ。	泣きそうな声で、でも力強く	もう泣きそうなユキ。	気持ち笑顔の仁太郎。
			ユキ	ユキ	ユキ	ユキ
			仁太郎	ユキ	仁太郎	仁太郎
			「ウゝ……………、お帰りなさい。」	「仁太郎さん。」	「やっと、やっと帰ってきたのね。 大変だったでしょう、そんなに痩せてしまつて。」	「……………にたろうさん。」
			「ただいま。」		「今、帰ってきました。」	「そこにいるのはユキさん。」

1 1 7	1 1 6	1 1 5	1 1 4	1 1 3	1 1 2	1 1 1	1 1 0	1 0 9
三味線を手ぬぐいで拭いている	三味線を手ぬぐいで拭いている	渡し場の土手。帰り支度をしている仁太郎とユキ。	夕日。岩木川。	渋い顔のボサマ三人組。	満足気な仁太郎。その隣りでやさしく見守るユキ。	人々が一斉に拍手をしだす。	松屋の前、仁太郎の三味線。	仁太郎の三味線。ジャガジャン。
ユキ	ユキ			村人F	村人C	村人B	村人A	
	「よかったね。すっかり太棹を自分のものにしたのね。」			○ <sub>14</sub> 「うん、こりや津軽が生んだ新しい三味線だ。」	○ <sub>13</sub> 「仁太郎が本物のボサマになったぞ。」	「今までの三味線とは全然違うぞ。」	「仁太郎さん、いいねえ。」	
				村人の女	村人D			
					「仁太郎のボサマだから仁太坊だ。」			
					「仁太郎さん、すごいわ。」			

<p>1 2 3</p>	<p>1 2 2</p>	<p>1 2 1</p>		<p>1 2 0</p>		<p>1 1 9</p>	<p>1 1 8</p>	
<p>仁太郎の横顔。</p> <p>仁太郎。</p> <p>ハツと表情を変えるユキ。</p> <p>三味線をひぎの上に寝かす仁太郎。</p> <p>聞かれたくないことを聞かれ、何処か遠くを見つめるユキ。</p>								
<p>仁太郎 「ありがとう。でも菊之助さんのおかげだよ。」</p> <p>仁太郎 オレ 「そうだ、菊之助さんはどうしてます？」</p> <p>仁太郎 「改めてお礼もしたいし、太棹も聞いて欲しいんだ。」</p> <p>ユキ 「仁太郎さん、実は菊之助さんはもう津軽にはいないのよ。」</p> <p>仁太郎 「えっ、どうして？」</p> <p>ユキ 「菊之助は海の方のアメリカに出发してしまったの。」</p> <p>仁太郎 「読んであげてくれて、お手紙をあずかっているのよ。」</p>								

1 2 9		1 2 8			1 2 7	1 2 6	1 2 5	1 2 4
タラップから多くの人々が乗船している。		横浜の港で、舟が就航の準備をしている。			(ユキの声と菊之助の声がかぶつていく) 横浜の町並み。		手紙を開くユキ。	胸元から手紙を取り出す。 (つつみは胸元へ戻す) 仁太郎の方を見て、
				菊之助 ○● 「新聞の仕事を本格的にするために、アメリカで勉強してきたと思います、急ですが旅立つことにしました。」		ユキ ○● 「仁太郎くん。君のことだから、新しい三味線での修行、うまくいったことと思います。僕は、新聞……」	ユキ 「じゃあ、読むわね。」	

1 3 2		1 3 1		1 3 0
<p>菊之助とデッキの間を子供が通 かかる菊之助。 カバンを降ろしてデッキにより</p>		<p>船の上のデッキの床。西洋風の カバンをおろす。</p>		<p>菊之助の横顔。</p>
	<p>菊之助 ○●●「めまぐるしく変わる新生日本の姿を みんなに知らせたい、 そして、自分の主張もしてみたい、 というのが僕の夢です。」</p>		<p>菊之助 ○●●「でも僕は、君が誰の真似でもない 君だけの三味線を弾こうと、頑張っている姿を見て、 僕も自分の一番やりたいことをやろうと 決心したのです。」</p>	<p>菊之助 ○●●「もともと東京から帰ったら 家業を継ぐと約束していたので 両親はがっかりです。」</p>

1 3 9	船上から手を振る人々。	菊之助 ○139 「この手紙は、君の最もよき理解者である」
1 3 8	見送る人々。	菊之助 ○138 「後のことは、留吉さんと相談して決めてください。」
1 3 7	ている。	菊之助 ○137 「太棹は君に差し上げます。」
1 3 5	船が出港しだす。紙ふぶきが舞っている。	菊之助 ○135 「アメリカで新聞を発行する仕事や新聞社を経営することを本格的に勉強してきます。」
1 3 4	よりかかる。	菊之助 ○134 「少しキョトンとしている菊之助。ニガ笑いをしつつ、デッキに再びよりかかる。」
1 3 3	りぬけようとしている。子供のあとを目で追う菊之助。人ゴミの中へ走り去っていく子供。	

<p>1 4 5</p> <p>1 4 4</p>	<p>1 4 3</p>	<p>1 4 2</p> <p>1 4 1</p> <p>1 4 0</p>
<p>――間――</p> <p>当道座の屋敷内、蝋燭の火。</p>	<p>カメラT・B</p> <p>ずっと何処か一点を見つめてい る二人。</p>	<p>空を見上げる菊之助。 希望に満ちた顔をしている。</p>
<p>検校</p> <p>○ト 「神原の仁太郎が、 義太夫の太棹を使った演奏で 人気を取っているようだな。」</p>	<p>仁太郎</p> <p>「そうかあ。菊之助さんは考える事が大きいなあ。」</p> <p>ユキ</p> <p>「本当に評判どおりの素晴らしい人ね。」</p>	<p>菊之助</p> <p>○ト 「何年か後にお会いした時、さらに成長した 君の太棹の演奏を聞けることを楽しみにしています。 ――菊之助――」</p> <p>ユキさんに託します。</p>



1 5 3	1 5 2	1 5 1	1 5 0	1 4 9	1 4 8	1 4 7	1 4 6
強い口調で。							
長老D	検校	長老B	検校	長老D	長老C	長老B	長老A
「確かに。我等の中で新しい三味線を研究しているのは	「人気・実力ともに当代随一の田原坊しかないだろう。」	「で、その代表には誰が。」	「そこで、この度の弘前城での園遊会のことだが、われらの代表と仁太郎との三味線合戦を是非にと役所からのお話があった。」	「われらも、ただ伝統を守ってゆくだけではメシも食って行けんということじゃ。」	「このままでは我々にとつても死活問題。黙って見過ごすわけにもゆくまい。」	「新政府になって、お上の保護がなくなってから、われらとて随分と技を研鑽してきたのじゃが。」	「金木の方では、当道座の芸はもう古いなどと申しておる輩もでてきておるそうじゃ。」

160	159	158	157	156	155	154
仁太郎の家の近くの土手。	走っている留吉。					頭を下げる田原坊。
	一同	検校	検校		田原坊	長老A
	「はっ。」	「それでは皆様方、ご異論はございませぬな。」	「この地のお客の耳は確かだ。お主の技量なら大丈夫と思 うが、さらに精進を重ね、決戦に備えよ。」	勝てる自信はございます。」	「仁太郎の叩き奏法と太棹については、 私も研究してまいりました。 従来の細棹では大勢のお客を前に独奏するには 迫力負けいたします。 それで私も太棹の修練をかなり積み、 完全に弾きこなすまでに至りました。	「田原坊よ、どうだ勝てるか。」

1 6 3		1 6 2	1 6 1
息を切らしている留吉。	留吉。 仁太郎の前にドカッと座り込む留吉。	土足で上がる留吉。 飯を食べていた仁太郎。	留吉がものすごい形相で走ってくる。 仁太郎の家の中。
留吉 仁太郎 留吉	留吉 留吉	留吉 留吉	SE：バン！ 留吉 留吉
あの当道座が	「ハッ、ハッ、ハッ。」	「仁太郎、メシなんか食ってる場合じゃないぞ！」	「いるか、仁太郎。」
	「いきなりどうしたんですか？」	「どうしたもこうしたも無いだろう。」	お前聞いて驚くな。

1 6 4	冷静な仁太郎。 顔を元に戻す仁太郎。	仁太郎 お前に決闘を申し込んできたんだぞ。 「ちよつと大ゲサですよ、留吉さん。」
1 6 5	顔を元に戻す仁太郎。	仁太郎 「今度の弘前での園遊会に出場しないかと 言われただけですよ。」
1 6 6	留吉、少し乗り出す。 (松屋の前) のり出す村人。	留吉 「なんだ、知ってたのか。……で、」
1 6 7	強気なお松。 声の方へ視線を向けるお松。	村人A 「で、どうなんだい。仁太郎は出場するのかい。」 お松 「仁太郎の三味線を津軽中に広める いい機会じゃないかい。」 村人B 「でも、たいしたもんだな。」

<p style="text-align: right;">170 169</p>	<p style="text-align: right;">168</p> <p>村人C（女）お松の方を見て、</p> <p style="text-align: center;">（仁太郎の家）</p> <p>オーバーに驚く留吉。</p> <p>あっけなく返答する留吉。</p> <p>また乗り出す留吉。</p> <p>（また、松屋の前）</p>	<p>村人B 「修行から帰ってきたと思ったらいきなり園遊会なんて、本当にたいしたもんだよ。」</p> <p>村人C（女）「ところで…。」</p> <p>留吉 「誰なんだ、お前の対戦相手は。」</p> <p>仁太郎 「田原坊らしいですよ。」</p> <p>留吉 「なあに、田原坊だつてエ。」</p> <p>仁太郎 「知ってるんですか。」</p> <p>留吉 「知らん。」</p> <p>留吉 「で、どんなやつなんだ、その田原坊ってやつは。」</p>
---	--	---

1 7 4		1 7 3	1 7 2	1 7 1
(再び仁太郎の家)				
一同	「おお。」	お松 「聞いた話によると、 十年か二十年に一人出るか出ないかの天才らしいよ。」	お松 「でも大丈夫なのかい。」	村人B 「そんなにすごいヤツなんかと勝負になるのかい。」
お松	「冗談じゃないよ。仁太郎は誰にだって負けるはずがない じゃないかい。」			

179	<p data-bbox="491 383 600 779">177 金木神社。階段の上の所に、仁太郎とユキが立っている。</p>	<p data-bbox="225 887 264 981">仁太郎</p> <p data-bbox="225 1093 264 1910">「俺、ユキさんが鞆を追ってこの階段を降りてきた時の姿、</p>
178		<p data-bbox="352 887 392 949">ユキ</p> <p data-bbox="352 1093 392 1715">「ここはあの時のまま。でも、もう十年以上たってるのよね。」</p>
176	<p data-bbox="632 383 671 719">仁太郎を見ている留吉。</p> <p data-bbox="759 383 799 674">何のことかわからず</p> <p data-bbox="823 383 863 808">たまらず笑ってしまう仁太郎。</p> <p data-bbox="959 383 999 719">出しそうになる仁太郎。</p> <p data-bbox="1023 383 1062 864">留吉の能天気ぶりに、思わず吹き</p> <p data-bbox="1158 383 1198 685">メシの方を見る留吉。</p>	<p data-bbox="695 887 735 981">仁太郎</p> <p data-bbox="695 1093 735 1361">「ワハハハハハ。」</p> <p data-bbox="895 887 935 981">仁太郎</p> <p data-bbox="895 1093 935 1205">「フッ。」</p> <p data-bbox="1094 887 1134 949">留吉</p> <p data-bbox="1094 1093 1134 1525">「なんかうまそうなメシだな。」</p> <p data-bbox="1230 887 1270 981">仁太郎</p> <p data-bbox="1230 1093 1270 1391">「今度はなんですか。」</p> <p data-bbox="1294 887 1334 949">留吉</p> <p data-bbox="1294 1093 1334 1361">「ところで仁太郎。」</p>
175		

1 8 2		1 8 1		1 8 0
<p style="text-align: right;">仁太郎の方を見るユキ。</p> <p style="text-align: center;">少しうつむいて、</p>				
<p style="text-align: right;">ユキ 「仁太郎さん、大変な事になっちゃいましたね。村の人達、仁太郎さんの話で持ちきりですよ。」</p> <p style="text-align: right;">ユキ 「お松さんなんか、村じゅうの人を連れて応援に行くって言って大ハリキリですよ。」</p> <p style="text-align: right;">仁太郎 「お松さん、言い出すと聞かないですからね。」</p> <p style="text-align: right;">ユキ 「それだけみんな仁太郎さんに期待しているんです。」</p> <p style="text-align: right;">ユキ 「母さんが言ってたっけ。ゴゼ唄や三味線を支えてきたのは、それを聞く人々の耳なんだって。娯楽の少ない北国の人達にとって唄や三味線への思いはとても強いものだわ。形式や権威には関係なく、本当にいい音を聞きたがっている人達が</p>				



186	<p>太陽の光で露出オーバーになって、全面ホワイト画面へ。まるで鳥の目線のような動きのカメラワークで。</p>		
185	<p>クツと顔を上げるユキ。その表情には一切の迷いは無い。仁太郎とユキの後ろ姿。</p>		
184	<p>仁太郎の顔UP。</p>		
183	<p>大勢いるのよ。 仁太郎さん、その人達の為にも弘前でがんばってね。」</p> <p>仁太郎 「勝ち負けじゃなく、津軽の人達の心に響く演奏をしてみたい。」 ユキ 「ええ、仁太郎さんならできるわ。きっと。」 ユキ 「(強い口調で) 信じてますから。私は仁太郎さんを信じてます。」</p>		

198	197	196	195	194	193	192	191	190	189	188	187	
少しイライラするお松。	村の人達も集まっている。	達。 反対側には検校と当道座の長老	キ・お松・留吉・住職。	舞台脇には仁太郎側の応援、ユ	った返している。	決戦舞台客席。	決戦舞台のロング。	用意されている。	仁太郎と田原坊の決戦の舞台が	橋の上を行き交う人々。	弘前城の堀。	桜が満開の弘前城。
お松 「まだ始まらないのかい。なにやっつてんだらうねえ。」												

202		201	200	199
<p>座布団に座ろうとする田原坊の足元。</p>	<p>座布団に座ろうとする田原坊の足元。</p> <p>てくる)</p> <p>(田原坊コールが徐々に聞こえてくる)</p> <p>続いて仁太郎がやって来る。</p> <p>段差を上がる小坊主と田原坊。</p> <p>つて来る。</p>	<p>小坊主に連れられて、田原坊がや</p>	<p>舞台の方に目をやるユキ。</p>	<p>お松をちよつと見るユキ。お松をなだめる。</p> <p>ちよつと乗り出す留吉。</p>
		ユキ	留吉 歓声	お松 ユキ
		「！」	「おつ、二人がやってきたぞ。」 「おおー！」	「お松さん、もう少しですよ。」 「そうかい。あたしや心臓が止まりそうだよ、まったく。」



2 2 5	2 2 4	2 2 3		2 2 2	2 2 1	2 2 0	2 1 9	2 1 8	2 1 7	2 1 6	2 1 5	2 1 4	2 1 3	2 1 2
田原坊三味線UP。	仁太郎顔UP。	観客たち。	いる。	仁太郎は目を閉じてうつつむいて	田原坊三味線UP。	曲に合わせて左手が動いている。	太棹を弾いている田原坊。	軽く頭を上下させている。				決戦舞台ロング。	聞いている観客。	仁太郎UP。
	検校 n						ユキ	お松	留吉	住職				
							「……。」	「……。」	「……。」	「……。」				
				「さすがは田原坊。完全に太棹を弾きこなしている。」										

2 3 1	2 3 0	2 2 9		2 2 8	2 2 7	2 2 6
く （拍手がフェードアウトしてい	無表情な田原坊。	勝利を確信している検校。		拍手をしていないユキ。少し不安 気な表情。	田原坊に一斉の拍手を送る観客。	顔を上げ三味線を少し下げ、曲が 終了した事をアピールする田原 坊。
		観客（女） 「よかったわよ。」	観客 「いいぞ、田原坊。」	観客 「いいぞ。」	観客（女） 「田原坊。」	観客 「おお〜。」
				観客 「よっ、日本一。」		

2 4 3	2 4 2	2 4 1	2 3 8	2 3 7	2 3 6	C	2 3 5	B	2 3 5	2 3 5	2 3 4	2 3 3	2 3 2
さらに増えてくる花びら。	徐々に花びらの量が増えてくる。	らが舞い落ちてくる。	仁太郎のUP。一ひらの桜の花びらが増える。	検校UP。	田原坊UP。	三味線を弾いている仁太郎。	祈るユキのUP。	目を閉じて祈るユキ。	三味線を弾いている仁太郎。	仁太郎の三味線UP。	仁太郎の曲、スタート。	仁太郎の顔UP。	

2 5 4	2 5 3	2 5 2	2 5 1	2 5 0	2 4 9	2 4 8	2 4 7	2 4 6	2 4 5	2 4 4		
観客の顔。	仁太郎の顔UP。	三味線を弾いている仁太郎。	左手も激しく動く。	激しく弦を弾くばち。	激しく動く指。	い落ちている。	画面いっぱい桜の花びらが舞い落ちている。	奏) (ここから真の津軽三味線の演奏)	激しく弦を弾く仁太郎。	検校も顔を上げる。	つづいて田原坊も顔を上げる。	顔を上げるユキ。
								検校	田原坊	ユキ		
								[!]	[!]	[!]		



2 6 6	2 6 5	2 6 4	2 6 3	2 6 2		2 6 1	2 6 0	2 5 9		2 5 8	2 5 7		2 5 6	2 5 5
<p>ユキの顔UP。 今にも泣き出しそうなユキ。 涙を流すユキ。 力を落としている田原坊。 こぶしを握り締める田原坊。 激しく弦を弾きつづける仁太郎。 仁太郎の背景が岩木川になり、仁太郎がフェードアウトする。 村の風景。 どこかの民家。 稲刈りをする農民。 さなぶりを舞う人々。 秋の紅葉の木。奥には湖。</p>														
<p>ユキ 「今ならはつきりと解る。 あなたの中で私の母が生きている事を。」 検校 n 「うーん：なんなんだ、この音色は。」 田原坊 「ウぐう。」</p>														

2 8 2	2 8 1	2 8 0	2 7 9	2 7 8	2 7 7		2 7 6	2 7 5	2 7 4	2 7 3	2 7 2	2 7 1	2 7 0	2 6 9	2 6 8	2 6 7
言葉を失う検校。	舞う桜の木。	舞台上の仁太郎。	仁太郎の指のUP。	三味線を弾きつづける仁太郎。	感動している観客。	山。	山頂に雪をいただいている岩木	吹雪で荒れている日本海。	炭俵編をする人。	屋根の雪下ろしをしている人。	弘前のある家。	夕日を背にした岩木山。	一面菜の花畑。	吹雪の風景。	吹雪の民家。	秋の紅葉に満ちた山間の川。

	2 8 9	2 8 9	2 8 8	2 8 7	2 8 6	2 8 5	2 8 4	2 8 3
エンディング	仁太郎の三味線のUP。 仁太郎を笑顔で見つめている田原坊。 田原坊UP。 観客席。 手を合わせる観客の老婆。 仁太郎の指UP。 笑顔のお松。 留吉。 住職。 涙がこぼれるユキ。 仁太郎の顔UP。 三味線のUP。 三味線を弾いている仁太郎。 ワーワー 観客の大歓声に包まれ、エンディングへ。							

ナレーション「その後、仁太坊の評判は津軽地方一円に広まり、

数多くの弟子が集まるようになった。

それでも彼は、生涯を通じて

粗末な小屋で過ごしたという。

彼が弟子たちに徹底してたたき込んだ教えは、

『人真似ならサルでもできる。自分の三味線を弾け』  
であった。

こんにち、世界的に日本の伝統音楽として

評価を受けている津軽三味線に

正調なるものがないのは、

始祖・仁太坊の精神が

受け継がれているからである。」